

HAKA TA  
博 多 141

—博多遺跡群第185次調査報告—

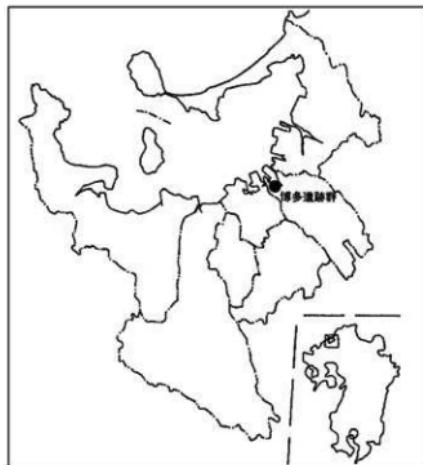
2011

福岡市教育委員会



HAKA TA  
博 多 141

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1124集

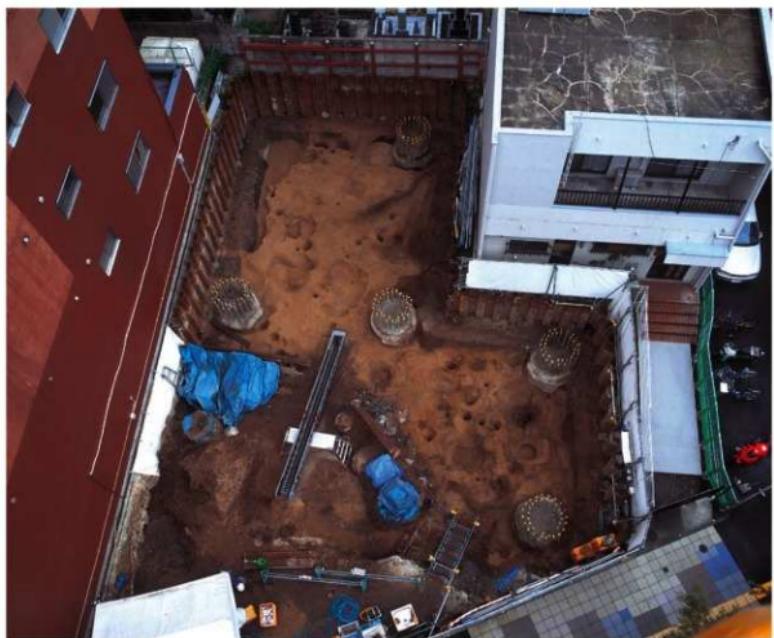


調査番号 0831

調査略号 HKT-185

2 0 1 1

福岡市教育委員会



1. 調査区全景（南西から）



2. SD27土層断面（北西から）



3. SK36土器出土状況（南西から）

## 序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は増加の一途をたどっており、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、博多区祇園町において発掘調査を実施した博多遺跡群第185次調査の記録を収録したものです。

調査の結果、弥生時代から中世にわたる数多くの生活遺構が確認され、長きにわたって本地域が発展し続けたことを示す良好な資料を得ることができました。

最後になりましたが、調査に際し快くご理解とご協力をいただきました株式会社ダイヨシトラストには心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が文化財に対する認識と理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会  
教育長 山田 裕嗣

## 例　　言

1. 本書は株式会社ダイヨシトラストが実施した博多区祇園町415-1・415-2・415-3・414-2地内において民間開発にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課が平成20年度に実施した博多遺跡群第185次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は旧国土座標第2系による座標北で、磁北はこれに $5^{\circ} 59'$  西偏する。
3. 調査区は予定建物を基軸として任意の3m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。
4. 遺構の呼称は略号化し、井戸→SE・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SP・他はSXとした。
5. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦による。
6. 本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬治・井上加代子による。
7. 製図は熊埜御堂和香子・井上加代子・米倉法子による。
8. 本書に用いた写真は加藤による。
9. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
10. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収藏管理されるので活用されたい。

## 本文目次

I.	はじめに .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1	
2. 調査の組織 .....	1	
II.	調査区の立地と環境 .....	2
III.	調査の記録 .....	7
1. 調査の概要 .....	7	
2. 上面の調査 .....	8	
3. 下面の調査 .....	30	
4. 包含層出土遺物 .....	38	
5. 混入その他の資料 .....	39	
IV.	小結 .....	43

## 挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/30,000) .....	3
Fig. 2	調査区位置図 (1/7,500) .....	4
Fig. 3	調査区周辺測量図 (1/500) .....	5
Fig. 4	上面遺構全体図 (1/100) .....	6
Fig. 5	SE14・23実測図 (1/60) .....	8
Fig. 6	SE14出土遺物実測図 (1/3) .....	8
Fig. 7	SE23出土遺物実測図.1 (1/3) .....	10
Fig. 8	SE23出土遺物実測図.2 (1/3) .....	11
Fig. 9	SE23出土遺物実測図.3 (1/3) .....	12
Fig.10	SK04・06・15・24・SD37・38実測図 (1/40) .....	14
Fig.11	SK04・06出土遺物実測図 (1/3) .....	15
Fig.12	SK15・24出土遺物実測図 (1/3) .....	17
Fig.13	SD37出土遺物実測図 (1/3) .....	18
Fig.14	SX26 (1/60) ・ SK02・21・SD08実測図 (1/40) .....	19
Fig.15	SX26出土遺物実測図 (1/3) .....	20
Fig.16	SK02・21出土遺物実測図 (1/3) .....	21
Fig.17	SK11・20・22実測図 (1/40) .....	22
Fig.18	SK20・22出土遺物実測図 (1/3) .....	23
Fig.19	SK01・05・07・09・12・13・18 (1/40) ・ 25実測図 (1/60) .....	25
Fig.20	SK01・09・12・13・18出土遺物実測図 (1/3) .....	26
Fig.21	SK25出土遺物実測図 (1/3) .....	28
Fig.22	下面遺構全体図 (1/100) .....	29
Fig.23	SK30・31・32・34・35 (1/40) ・ 29・36・SE33実測図 (1/60) .....	30
Fig.24	SK32・35出土遺物実測図 (1/3) .....	31
Fig.25	SD27実測図 (1/60) .....	32
Fig.26	SD27上層出土遺物実測図 (1/3) .....	33
Fig.27	SD27下層出土遺物実測図 (1/3) .....	34

Fig.28 SE33出土遺物実測図（1/3） .....	35
Fig.29 SK29・30・31出土遺物実測図（1/3） .....	36
Fig.30 SK36出土遺物実測図（1/3） .....	37
Fig.31 包含層出土遺物実測図（1/3） .....	39
Fig.32 混入その他の資料実測図（1/3、250・251-1/4） .....	40
Fig.33 墓輪出土位置図（1/1000・1/6） .....	44

## 写 真 目 次

Ph.1 上面全景（南西から） .....	7	Ph.23 SK18 土層断面（北西から） .....	27
Ph.2 SE14（北西から） .....	9	Ph.24 SK18（北西から） .....	27
Ph.3 SE23 井筒検出状況（北西から） .....	9	Ph.25 SK25 土層断面（南東から） .....	30
Ph.4 SE23 下半部断面（北西から） .....	9	Ph.26 下面全景（南西から） .....	31
Ph.5 SK04（北西から） .....	13	Ph.27 SK32（北西から） .....	31
Ph.6 SK06（西から） .....	16	Ph.28 SD27（南西から） .....	32
Ph.7 SK24（東から） .....	16	Ph.29 SE33（南東から） .....	35
Ph.8 SX26（西から） .....	18	Ph.30 SK29（北西から） .....	36
Ph.9 SX26 土層断面（西から） .....	18	Ph.31 SK30（北西から） .....	37
Ph.10 SK02（南西から） .....	21	Ph.32 SK31（西から） .....	38
Ph.11 SK21 土層断面（南西から） .....	21	Ph.33 SK34（北から） .....	38
Ph.12 SK21（南西から） .....	21	Ph.34 SK36（南西から） .....	38
Ph.13 SD08（左）・SK09 断面（南西から） .....	22	Ph.35 出土遺物.1 .....	41
Ph.14 SK11（北西から） .....	23	Ph.36 出土遺物.2 .....	42
Ph.15 SK20 土層断面（北東から） .....	23		
Ph.16 SK20（南西から） .....	23		
Ph.17 SK22 土層断面（南から） .....	24		
Ph.18 SK22（西から） .....	24		
Ph.19 SK05（南西から） .....	24		
Ph.20 SK12 土層断面（北西から） .....	26		
Ph.21 SK12（北西から） .....	26		
Ph.22 SK13（東から） .....	27		

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区祇園町415-1・415-2・415-3・414-2地内において、株式会社ダイヨシトラストより宿泊商業施設建設の計画に当たって、埋蔵文化財の有無の照会が、平成19年10月9日に埋蔵文化財第1課に提出された事により始まる。申請面積は282.43m<sup>2</sup>、受付番号は19-2-524である。

埋蔵文化財第1課で確認した所、周知の遺跡である博多遺跡群内に位置し、過去同社により開発目的で申請がなされ(12-2-279)、平成12年8月22日に確認調査が行われている土地であった。確認調査の結果、現GL-180cmで中世の遺構面が確認され、遺構が遺存していることがわかつていた。同課では設計変更等で現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。そのため記録保存として事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して同社と教育委員会との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成20年8月11日に着手、同年9月22日に全ての工程を終了した。

調査番号	0831	遺跡略号	HKT-185
調査地地籍	博多区祇園町415-1・415-2・415-3・414-2	分布地図番号	49(天神)0121
開発面積	288.43m <sup>2</sup>	調査実施面積	113.71m <sup>2</sup>
調査期間	080811～080922	事前審査番号	19-2-524

## 2. 調査の組織

【調査委託】株式会社ダイヨシトラスト

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣

【調査総括】文化財部長 矢野三津夫 埋蔵文化財第1課長 山口謙治

調査係長 米倉秀紀

【調査庶務】文化財整備課 古賀とも子

【発掘調査】加藤良彦

【発掘作業】永田豊彦 原田浩 藤村正勝 山中征生 浦伸英 中村尚美 今村由利

北野宏行 近藤英彦 嶋山幸義 濱口長治 米良恵美 元澤慶寛

結城敦雄 中野暢子

【整理作業】国武真理子 齋田慧

## II. 調査区の立地と環境

博多遺跡群は、北を陸繫島である志賀島と海の中道、西を糸島半島・玄界島・能古島とによって囲まれた天然の良港である博多湾の南東部に位置する。

湾岸には、湾内を巡る左転迴流と瑞梅寺川・室見川・那珂川・多々良川等の諸河川の搬出する砂とによって著しい砂丘の発達がみられ、当遺跡群はその那珂川右岸に形成された3列の、内陸側2列の「博多濱（櫛田濱・袖の濱）」と湾岸1列の「息（沖）の濱」と称される砂丘上に立地している。遺跡群は西を那珂川とその支流の博多川、東を中世末に開削されたと伝えられる石堂川、南を同じく石堂川開削以前に砂丘南辺を西流し那珂川に合流していた旧比恵川を改修したと伝えられる「房州堀」にと、中世末には四方を水によって囲まれ防護された地域である。

「博多濱」では黒川式・夜臼式土器が採集されており、このころから人跡が伺える。遺構は147次調査地点から弥生前期末の腰棺墓が検出されており、それ以前の形成であることが知られる。集落は検出されておらず、現在のところ集落の形成が確認できるのは弥生中期前半以降である。

「沖の濱」は第5次調査地点で地表下4.5mの地点から碇石が出土しており、古代段階までは形成途上にあった新しい砂丘であり、12世紀初頭には低地が埋め立てられ博多濱と陸繫化し、確実な遺構は12世紀後半以降で、同時期に砂丘中央を貫く幹線道路が整備されている。

大陸と指呼の間にあるこの地は、江戸時代の領国に至るまで常に国内の对外交渉の表玄関としての役割を果たしてきた。弥生時代中期前半には竪穴住居群と腰棺墓群を成立させる集落となり、終末期から5世紀にかけては竪穴住居群と方形周溝墓群、28・31次調査区検出の5世紀前葉60m級の前方後円墳（博多1号墳）・109次調査区検出の5世紀後半24～25m級の前方後円墳（SX223-1・博多2号墳？）を出現させるまでになっており、殊に終末期～古墳時代前期は鍛冶工房の出現と近畿・東海・吉備・山陰・半島系と広範にわたる土器群が出土し、先進性と对外交渉の拠点としての面を早くも示している。筑紫国造弊井の反乱後の536年「那津官家」の設置以降、古代には大宰府の要津、唯一の外港として軍事・外港の基幹をなし、方100mの区画溝に大型建物・瓦・帶金具・石帯・陶硯・「長官」「佐」等の墨書き土器と、官衙を示す多くの資料が出土し「鶴臚中島館」や「津厨」が考えられている。博多が国際貿易都市として大发展するのは「鶴臚館」の衰退後平安後期から鎌倉前期にかけての居留唐人街の「博多津唐房」の形成からで、中国を中心とした膨大な量と質の貿易陶磁器・墨書き陶磁器等が出土する。以後、聖福寺・承天寺・妙楽寺の建立、13世紀末の鎮西探題の設置、室町幕府による九州探題の設置・勘合貿易の開始と、名実共に九州の中心となる。しかし平和裡の発展のみではなく、対外的には貞観11（869）年新羅海賊侵攻・寛文2（1019）年刀伊の入寇・文永11（1274）年弘安4（1284）年の元寇、対内的には天慶3（940）年藤原純友の乱・元弘3（1333）年鎮西探題の滅亡・天文1（1532）年大友大内の戦い・永禄2（1559）年大友筑紫惟門の戦い・永禄12（1569）年元龟2（1571）年の大友毛利の戦い・天正2（1574）年大友龍造寺の戦い・天正11（1583）年大友島津の戦いと、この地の支配権を巡って繁栄と戦乱を繰り返し、天正14（1586）年島津の焼き討ちによりことごとく焼き尽くされた。天正15（1587）年島津征伐に向かう太閤秀吉によって現町割りに復興され、秀吉の恩寵とも相まって朝鮮出兵の兵站基地として往時の賑わいを取り戻すが、徳川幕府の鎖国政策により国際貿易都市としての役割を長崎に譲り、一城下町・商業都市として明治を迎える。



Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/30,000)

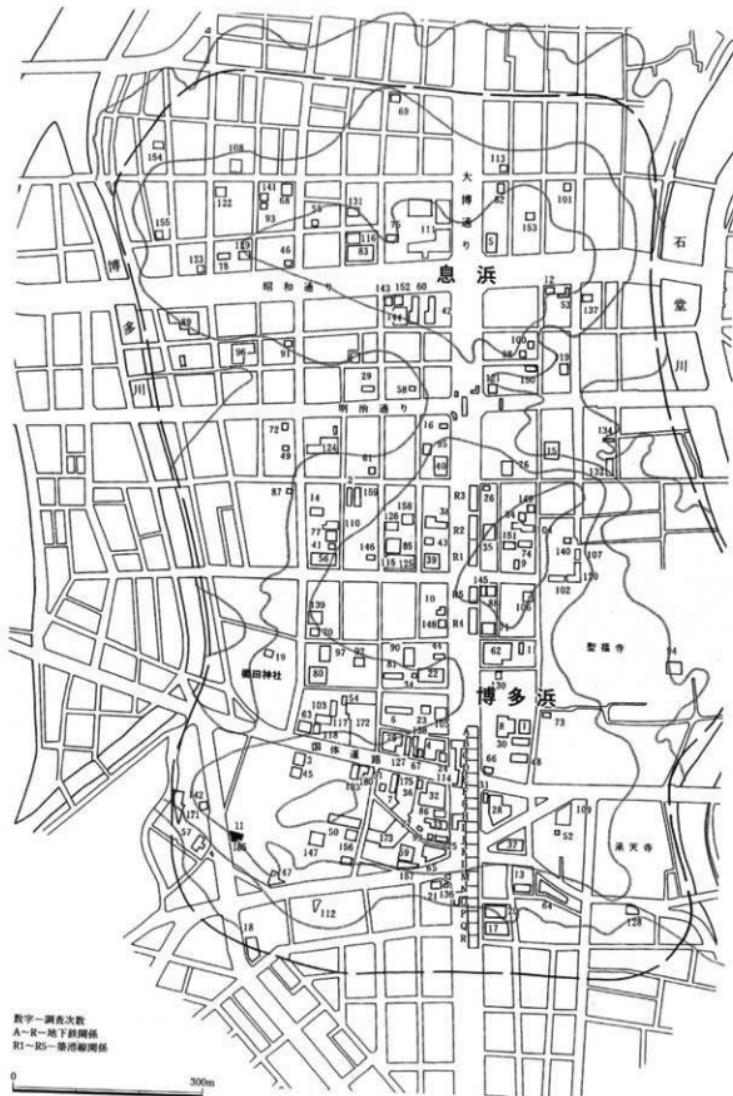


Fig.2 調査区位置図 (1/7,500)

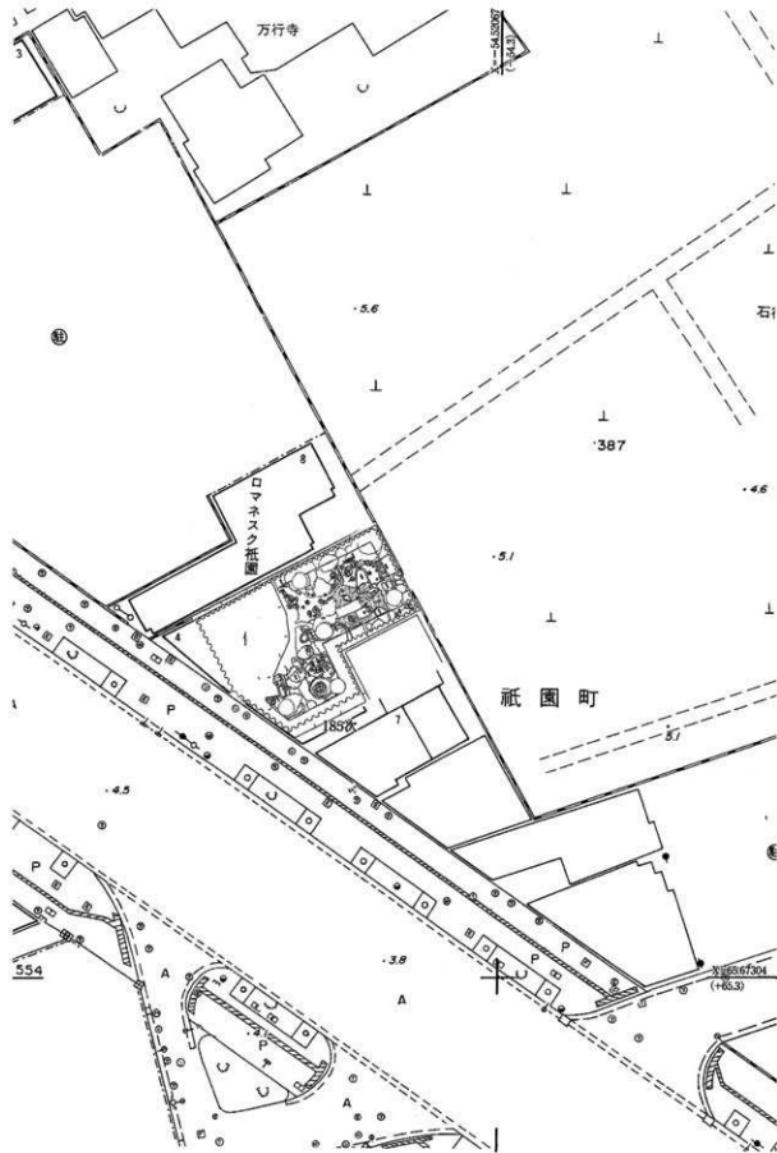


Fig.3 調査区周辺測量図 (1/500)

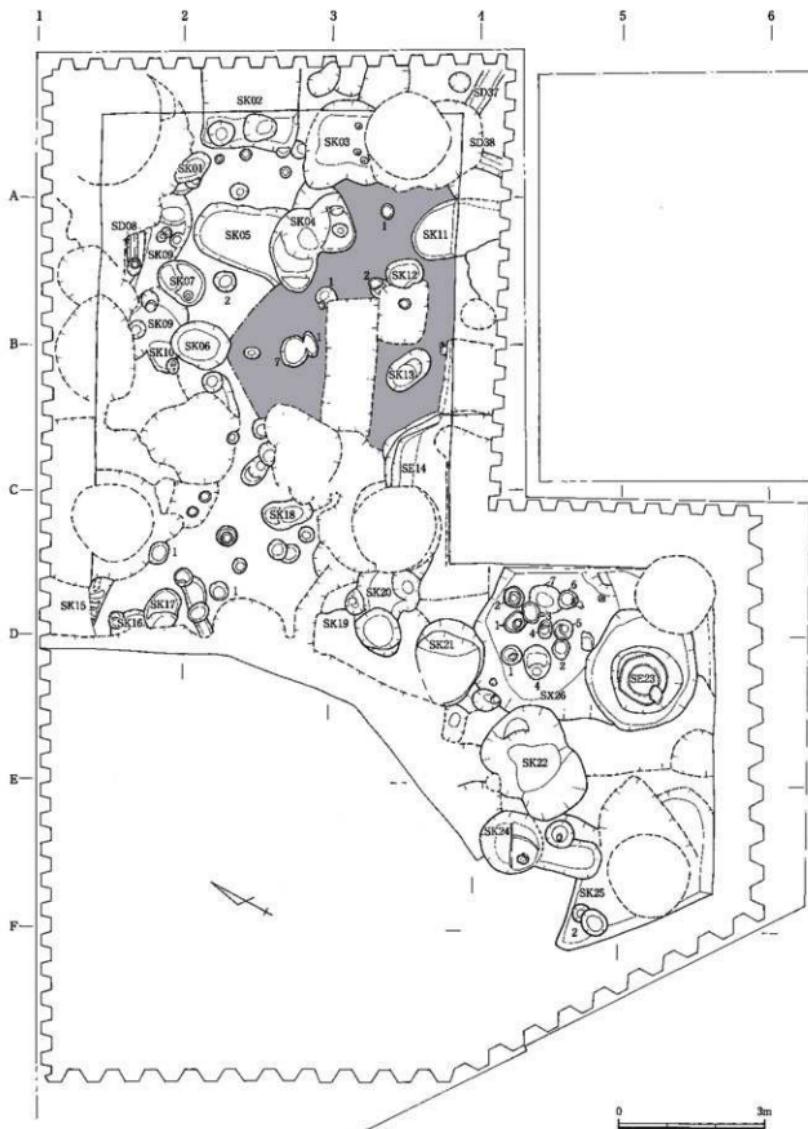


Fig.4 上面遺構全図 (1/100)

### III. 調査区の記録

#### 1. 調査の概要

本調査区は博多遺跡群の「博多濱」の砂丘群Iとされる内陸側最奥部の砂丘南西側緩斜面に位置し、現況は駐車場で地表標高は4.6mを測る。

周辺では本調査区の南側に「房州塙」を検出した第47・59次調査区が、東側に古墳前期の鉄器工房関連資料が多く出土した第142・147次調査区が位置し、北側には第45次調査区他多数の調査区が密集する(Fig.1~3)。

確認調査の結果搅乱が深く、110cmまでは客土層・180cmまでが全面搅乱層で、搅乱層の除去後を調査第1面とした。北1/3程はすでに基盤の黄灰色砂が露出し、以南は暗褐色砂質土の包含層が部分的に20cm程度遺存し基盤層が南に緩やかに下がる。この下面を調査第2面とした。

調査は測量基準線を予定建物の基準線に合わせ、任意で3mグリッドを設定し実施した。排土はさらに深く搅乱され遺構が遺存しない西部の8×10m程の範囲を発掘調査対象から除外し排土置場として処理できため反転することなく、全面を一気に調査することができた。

狹小な申請地での安全確保と工事の工程の関係から杭打ち先行となり、1mの表土鏟き取りを業者が実施後8月7日に現地協議を行った。さらに職員立ち会いのもと改めて80cmの鏟き取りを実施し、8月11日より調査に着手する事とした。9月5日に第1面の全景を撮影、9月9日に測量・実測を完了し、掘り下げを開始。9月17日に第2面を完掘・全景を撮影、9月19日に実測を完了し、9月19日に調査機材を撤収し調査を完了した。

上面の著しい搅乱のため中世の遺構面は遺存せず、遺構が上面で土壌5基・溝2条・井戸2基の9基検出されるのみで、遺存状態は悪い。このため、古代以前の遺構が全体の3/4を占めている。検出したおもな遺構は、上面で中世は先述のとおり9基、古代の土壌2基・溝1条・水溜遺構2基、古墳後期の土壌3基、古墳前期の土壌11基、下面では古代の土壌1基・古墳後期の土壌1基、古墳前期の土壌3基・溝1条・井戸1基、弥生終末期の土壌2基で、古墳前期の遺構が半分を占め、本調査区の中心となっている。

遺物は弥生土器・土師器・須恵器・埴輪片・瓦・貿易陶磁器等コンテナ20箱分を検出した。



Ph.1 上面全景（南西から）

弥生終末期の土壌SK36からは脚付土器等完形に近い土器4点が密集して出土した。古墳前期の大溝SD27は幅5m・深さ1.2mを測り、方形周溝墓の周溝の可能性もある。円筒埴輪の小片も数点確認され、周辺の鉄器工房の存在など、あり方が前方後円墳である博多1号墳周辺に類似し、辺り一帯に前方後円墳を伴う墓群が広がる可能性がある。

## 2. 上面の調査 (Fig.4 Ph.1)

上面の調査は、著しい搅乱のため中世の遺構面は遺存せず、搅乱面直下に古代以前の遺構面が露出している。中世の遺存する遺構は土壌5基・溝2条・井戸2基の9基のみで、他に古代の土壌2基・溝1条・水溜遺構2基、古墳後期の土壌3基、古墳前期の土壌11基で、中世と古墳前期が主体を占める。

1). 中世の遺構 中世の遺構は全面の搅乱のため深い遺構が残るのみで生活面は遺存していない。遺構は全体的に分布し、井戸は南北方向に並ぶ。

(1). 井戸 調査区中央のSE14とその6m程南のSE23の掘方円形の井戸2基を検出した。

SE14 (Fig.5 Ph.2) C3グリッドに位置し、井筒を含め掘方の半分以上が調査区外に、西部は径1.8mのコンクリート杭に切られ全体は伺えない。掘方は径2.3m +  $\alpha$  深さ1.4mを測る。灰褐色～暗灰褐色の混土中砂で埋め戻され、最下面は淡灰褐色の砂で埋める。

出土遺物 (Fig.6 Ph.35) 1～3は白磁碗小片。1はIV類。釉・胎土ともに灰白色。2はII類で釉は若干黄味を帯び、外面に著しい擦痕がある。3はV類・高台径7.4cm。高台脇から高台内は露胎・釉は貫入があり露胎部は黄白色。全周の1/8残存。ともに胎土に黒色微粒を含む。4・5は土器器丸底

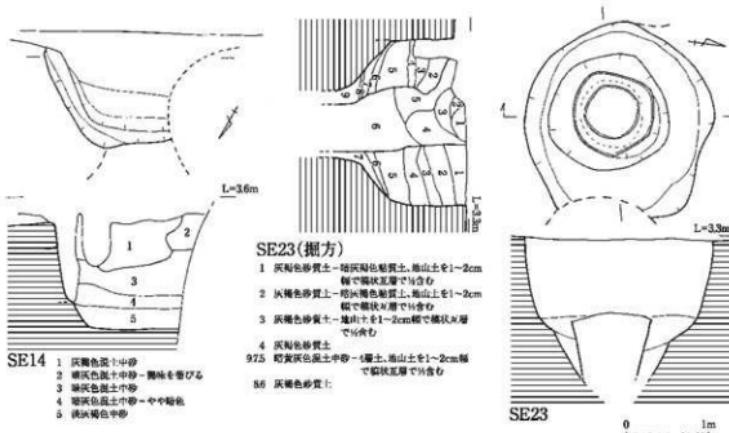


Fig.5 SE-14・23実測図 (1/60)

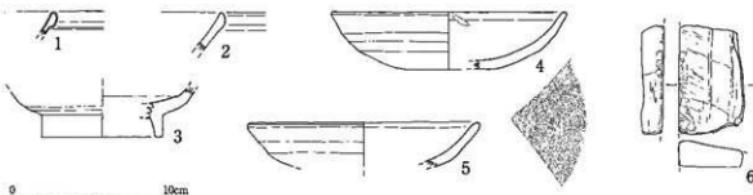


Fig.6 SE14出土遺物実測図 (1/3)

坏。4は口径14.4器高3.5cm。内外面回転ナデ後、外面口縁下に2段の回転ヘラナデ、底部は回転ヘラ切り押し出し後不定方向ナデ消し・板圧痕残る。内面は口縁以下にケンマ様の丁寧なナデ。内外面鈍い橙色・外底は暗黄褐色。胎土に砂粒を若干含む。全周の1/4残存。5は口径14.2cm。調整は4と同様。内面は口縁以下にケンマ・口縁下にヘラ当て痕が残る。外面鈍い黄橙色・外底鈍い橙色・内面淡黄灰色。胎土に砂粒を少量含む。全周の1/12残存。6は中粒砂岩製の砥石。厚さ4cm・幅1.6cmに小割される。上面と右側面を砥面に使用。

小口と底面は敲打の成形面が残る。筋理は上面に並行。暗黄灰色。7(Ph.35)は櫛羽口付近の炉壁で、内面は熔解し、厚み2cmの1.7cmは黒灰色にガラス化する。11世紀末～12世紀初頭をしめす。

SE23 (Fig.5 Ph.3・4) SE14の真南6m程のE5グリッドに位置し、SX26を切る。径2.4m深さ1.2m・径1.35m深さ0.6m強の2重の堀方に、上方径100cm・下方径65cm高さ80cm強の木桶を井筒として据えたと考えられるが木質は腐朽し土壤化している。井筒は土層断面では上位から確認できる。覆土は埋土である。6層以下は雨天で断面が崩落し確認できていない。

出土遺物 (Fig.7～9 Ph.41) 8・9は越州窯系青磁。8は碗で口径12.2cm。釉はオリーブ灰色の透明。胎土は灰白色で若干の小気泡を含む。外面は片切彫りで幅5～10mmの花弁を連続。内面はヘラ描きで6本程の界線。全周の1/4残存。9は水柱の胴部片で内面は露胎。外面は複線のヘラ描き界線・オリーブ灰色の透明釉。内面暗黄灰・胎土淡灰色。10～20は白磁。10～12はIV類碗。10は口径14.4cm。上質で釉は灰白色・青味を帯びる。胎土は白色。1/10残存。11は口径16.6cm。釉は黄灰・胎土は灰白色。1/12残存。12は口径16.4cm。釉・胎土は灰白色。黒色微粒をやや多く含む。1/12残存。13はII類で口径15.0cm。釉・胎土は灰白色で釉は黄味を帯びる。黒色微粒をやや多く含む。1/10残存。14はIV類碗底部。高台径6.2cm。釉は灰白色で高台脇まで施し貫入が入る。胎土は灰白色。高台外端を細かく敲打。全周の1/3残存。15はVI類碗底部。高台径6.0cm。釉は灰白色で貫入。胎土は白色で黒色微粒をやや多く含む。見込み圈線内に浅い片切彫りの文様。高台脇を打ち欠き瓦玉に転用。1/2残存。16～20は皿。16は高台付皿I類・口径12.6cm。釉は灰白色で細かな貫



Ph.2 SE14 (北西から)



Ph.3 SE23井筒検出状況 (北西から)



Ph.4 SE23下半部断面 (北西から)

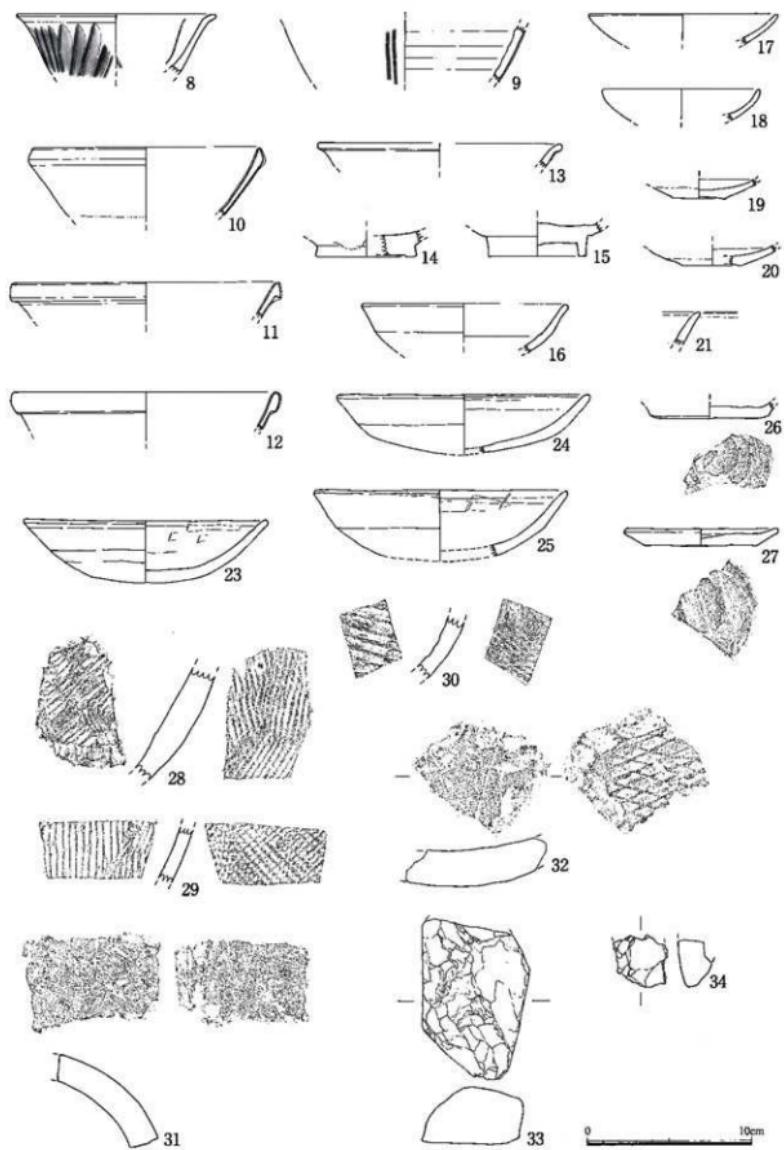


Fig.7 SE23出土遺物実測図.1 (1/3)

入・ピンホールが多。胎土は白色。17~20は平底II類。釉・胎土は灰白色で釉は薄く黄味を帯びる。17は口径11.6cm。18は口径9.6cm。見込みに段状の圈線。1/6残存。19・20は底部。外面底部脇は露胎で淡灰色を呈し、見込みに段状の圈線。19は底径3.2cm。20は底径3.2cm。21は黒褐釉の天目碗。口唇部は釉掻き取りで暗褐色を呈し直下に禾目が入る。胎土灰色。23~27は土師器。23~25は丸底坏。調整は輪轆成形後外部は回転ヘラ切り・押し出し後不定方向ナデ消し。内面は口縁以下に丁寧なナデ消しとケンマ。口縁下に縦方向のヘラ当て痕。23は口径15.0器高3.8cm。6.4×2.0mmの初期圧痕あり。外面褐灰・内面明褐灰色。胎土に砂粒を若干含む。1/4残存。24は口径15.6器高3.7

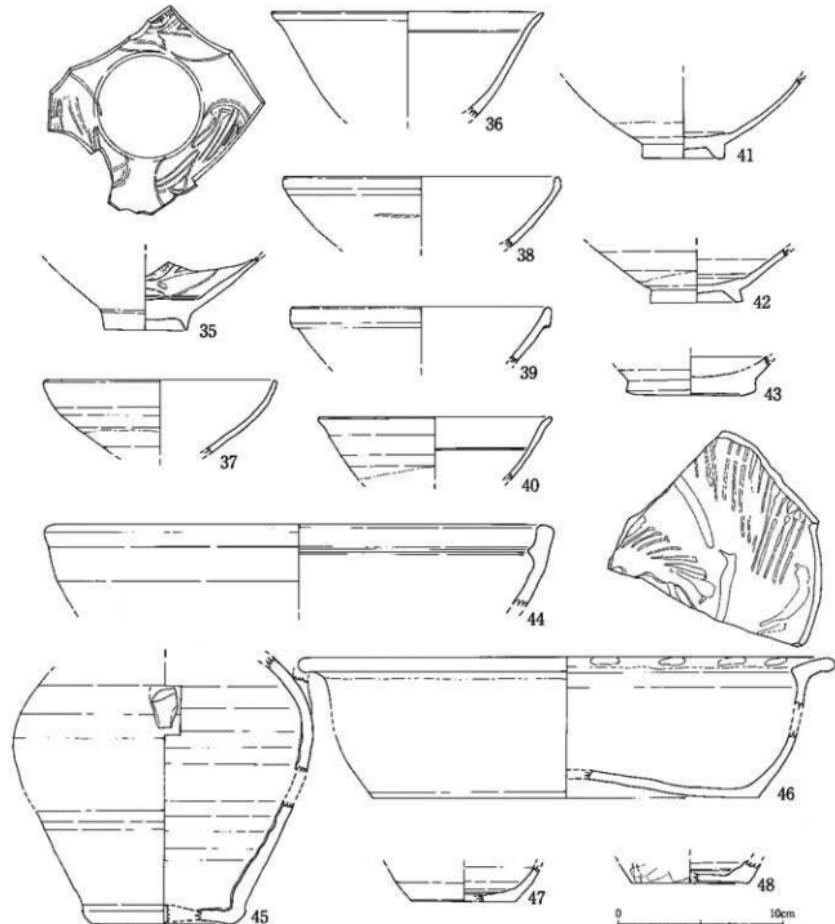


Fig.8 SE23出土遺物実測図.2 (1/3)

cm。外面鈍い橙色・内面浅黄橙色。胎土は精良。25は口径15.6器高4.3cm。外面口縁～内面浅黄橙色。外底褐灰色。胎土精良。1/8残存。26・27は皿。26は底径7.2cm。内外面とも回転ナデ、内底は不定方向ナデ・外底は右回転ヘラ切り。外面褐灰・内面暗黄灰色。胎土に砂粒を少量含む。1/4残存。27は口径9.4器高1.1cm。内外面に左回転ナデ・内底不定方向ナデ・外底回転ヘラ切り後明瞭な板圧痕。内外面浅黄橙色。胎土は1mm以下の石英粒を少量含む。残存1/8。28～30は高麗無釉陶器甕腹部小片。28は外面平行叩き・内面平行当て具痕。器厚1.8cm。内外面断面とも暗灰色。胎土に砂粒を含まない。29は外面格子目叩き・内面平行当て具痕。還元焼成されず内外面断面とも灰黄色。胎土に石英粒を若干含む。30は外面斜格子状に重ねた平行叩き・内面粗い平行当て具痕。外面暗灰褐色・内断面黒灰色で焼成は焼締め。備前焼の可能性もある。31は丸瓦で内面から2/3程ヘラ切り後折断。外面は粗い斜格子叩き後ナデ消し。3mm以下の石英粒を多量に含み暗灰色・焼成は須恵質。32は平瓦。外面はやや粗い斜格子叩き。3mm以下の石英粒を少量含み暗灰色。33は石英の火打ち石。自然角礫の両側縁を用い、使用によりエッジが潰れた部分は交互剥離により鋭く再生。10.4+ $\alpha$ ×6.6×3.7cm318gを測る。34は鉄滓の流出滓。ガラス質で黒灰色。上面に小気泡が多く下面は土砂が一部付着。厚2.1・3.3×3.3cmに小割。Fig.8・9は井筒部分出土。35は青白磁碗。高台径5.0cm。内面体部にヘラ書き蓮華文。釉は淡青白色で高台内底が露胎・外面に大きめの貫入。胎土

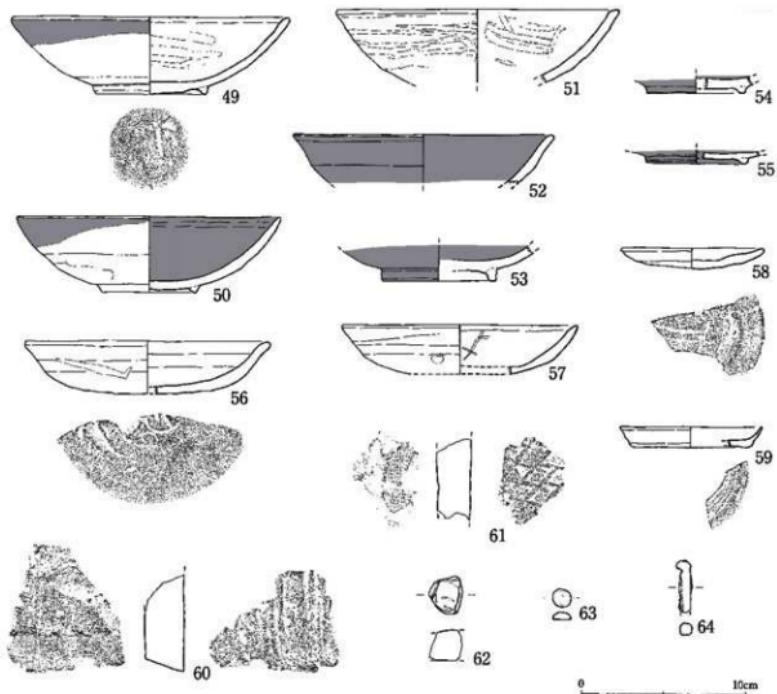


Fig.9 SE23出土遺物実測図.3 (1/3)

白色。36は高麗青磁碗。口径16.6cm。口唇外面が面取り内面口縁下に沈線。釉は緑灰色でやや厚め・胎土淡灰色。1/12残存。37～43は白磁碗。37・38・41・42はⅡ類。釉・胎土は黄味がかった灰白色。37は口径14.4cm。外面下半は露胎。1/3残存。38は口径16.8cm。外面中位に重ね焼き痕。1/8残存。41・42は高台。径5.1・5.6cm。見込みに圓線・中央にヘラナデ1条。外面下半は露胎。39・43はIV類で釉・胎は灰白色。39は口径16.0cm。1/12残存。43は高台径7.9cm。見込みに圓線。外面露胎で高台脇は飛鉢状に削る。40はV類。口径14.4cm。内面口縁下に沈線。釉は灰白・胎土は淡灰色。外面下位は露胎。1/8残存。44～48は中国陶器。44・45はC群。44は捏鉢。口径31.2cm。全面回転ナデ。内外断面とも赤褐色。3mm以下の石英粒を多量に含む。1/12残存。45はガラス坩堝。使用済みで胴径18.2cm。肩上位に取手の基部。須恵質に還元焼成され暗灰色。内面は全面熔解したガラスに覆われ銀化し青味を帯びた黄灰色。破断面にもガラスが染む。胎土は黒灰色で3mm以下の石英粒を多量に含む。1/3残存。46～48はA群。46は釣口縁黄釉盤。口径32.6cm。内面に鉄彩で花文を描き口縁外面から内面に黄釉。口唇内面は拭き取り・胎土目が残る。露胎部は赤褐色で断面灰色・砂粒をやや多く含む。1/6残存。47・48は瓶。47は底径6.4cm。被熱し黄白色を呈す。48は底径7.2cm。外面に一部灰オリーブの釉。外面黄灰・内面スリップ掛けで黄白色・断面灰白色。49～55は瓦器塊。輪轆成形後外面上位以下に回転割り・不定方向のナデ消し後幅広の粗いヨコケンマ、内面は丁寧なナデ後単位不明瞭の幅広なケンマを施し、土師器丸底坏と同技法で作られる。胎土に砂粒を含まない。49は口径17.1器高4.7cm。外面口縁は黒変・他は灰白色。低い高台内にヘラで「大」を刻字する。1/4残存。50は口径16.2器高4.6cm。外面口縁から内面は黒変・他は灰白色。1/2残存。51は口径14.2cm。外面黒灰・内面暗灰・断面灰色。内面のケンマは粗い。52は口径16.0cm。内面口縁から外面は黒灰・他は灰白色。1/8残存。53～55は底部。高台径7.0・6.0・6.2cm。55は全面黒変。56～59は土師器。56・57は丸底坏。瓦器塊と同様の技法で成形され、外底は回転ヘラ切り。鈍い黄橙～浅黄橙色を呈し砂粒は少量含む。口径・器高は15.0×3.2・14.4×3.0cmを測る。58・59は皿。58は口径9.8器高1.3cm。外底は回転ヘラ切り後不定方向ナデ・板圧痕・黄橙色。59は回転糸切り。口径8.6器高1.3cm。外底は回転糸切り・鈍い黄橙色。60は繩目タタキ平瓦端部。厚2.3cm。黒灰色で焼成は軟質。61は格子目タタキ丸瓦。厚2.0cm。黒灰色で焼成良好。62は瓦片転用瓦玉。2.3×2.0×1.9cm8g。63はガラス製平玉。径6.0厚0.45cm1.49g・青緑色半透明で表面は黄白色に銀化。4は鉄釘。頭部で8×7体部で5×5mm。12世紀初頭から前半。

## (2). 土壌 調査区北・中・南部で東西方向に、4m前後の間隔で井戸と並んで5基が分布する。

SK04 (Fig.10 Ph.5) B2グリッドに位置し、SK05を切る。東西方向の不整形土壌で $2.1 + \alpha \times 1.7 \times 0.45$ mを測る。底面は3段で、風成堆積で半分埋没後再掘し埋め戻される。

出土遺物 (Fig.11 Ph.41) 65は越州窯系青磁小壺。口径8.2cm。内外にオリーブ灰色釉。胎土灰色。66～69は白磁碗。66はⅡ類。口径15.6器高5.9cm。釉・胎土は黄味を帯びた灰白色。高台内に「林花押」の墨書。1/3残存。67・69はIV類。67は口径17.6cm。釉・胎土は灰白色。1/12残存。69は高台径7.0cm。被



Ph.5 SK04 (北西から)

熱で釉・胎土は黄灰白色・不透明。68は高台径6.4cm。釉は緑がかった灰白色で細かな貫入・胎土灰色。70はII白磁高台皿。口径13.0器高3.0cm。釉・胎土は灰白色。2/3残存。71～73は白磁杯。口径は碗VI類に似て上面を水平に面取り。見込みに圓線。釉は青味を帯びた透明灰白で細かな貫入。全面施釉し外底を搔き取る。胎土は明灰色。71は口径10.4器高3.0cm。1/3残存。72は口径10.4器高2.9cm。2/3残存。73は口径11.0器高2.8cm。1/3残存。74はA群陶器ガラス咲堀口縁部。口縁は折り込み玉縁。被熱で外面の釉は黄白色不透明に泡立つ。胎土淡灰～鈍い黄橙色。75は楠葉系瓦器塊。ヨコナデ後内面に細かなケンマを疎らに施す。胎土精良。黒色。76は瓦賀鉢。内外面ヨコナデ・暗灰色で口縁内面から外面が黒変。3mm以下の砂粒をやや多く含む。77は土師器皿。口径9.5器高1.5cm。外底は回転糸切り後ナデ消し・板压痕。橙色。胎土精良。ほぼ完形。78は土師器壺。口径14.4器高3.0cm。内外面回転ナデ。外底は回転糸切り。橙色。2/3残存。12世紀中頃を示す。

SK06 (Fig.10 Ph.6) SK04の3m程西、B2グリッドに位置し、SK09を切る。円形土壙で $1.2 \times 1.05 \times 0.38$ mを測る。下半は埋め戻し、以上は自然堆積で埋没する。

出土遺物 (Fig.11 Ph.41) 79から83は白磁碗。口径15.0cm。低い玉縁口縁で釉は

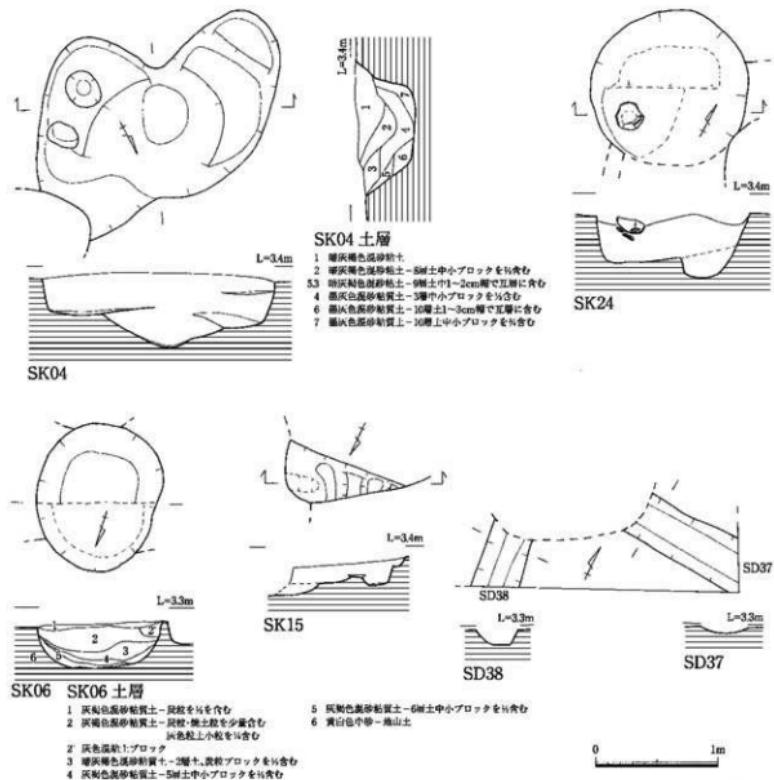
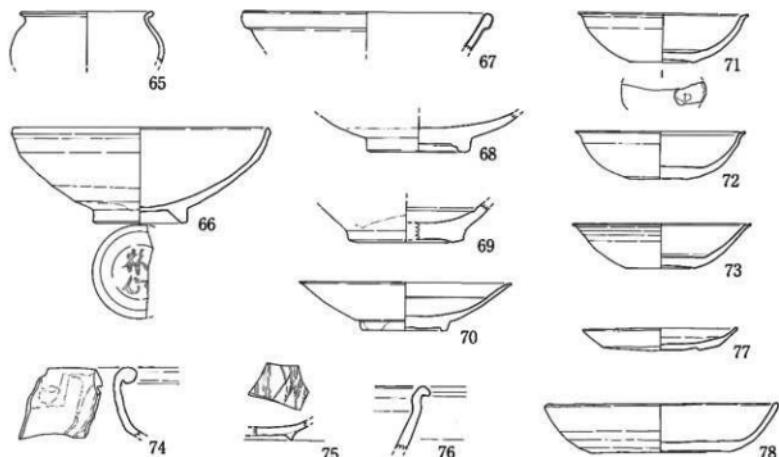
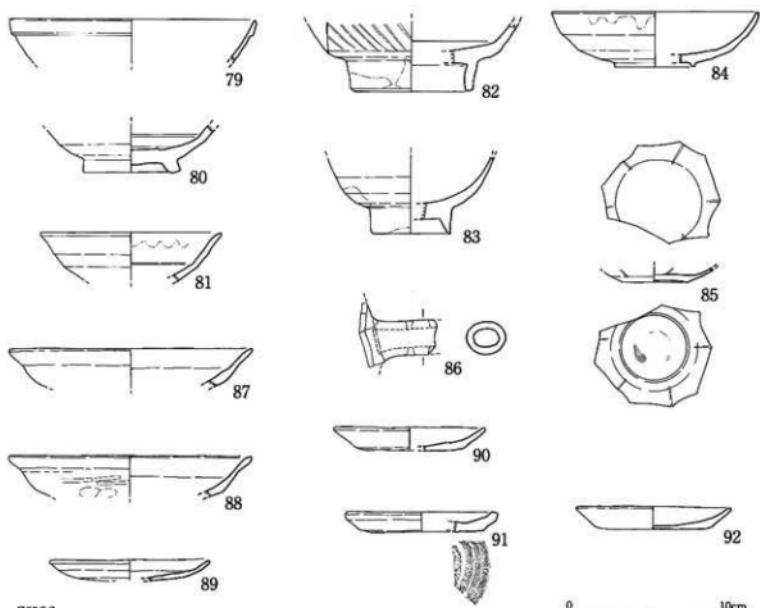


Fig.10 SK04・06・15・24・SD37・38実測図 (1/40)



SK04



SK06

0 10cm

Fig.11 SK04・06出土遺物実測図 (1/3)



Ph.6 SK06 (西から)

は花弁の縁をくぼませ内面は白堆線で輪花を表現。軸は淡青色で細かな貫入。高台内は搔き取りで露胎。トチン痕。胎土白色。86はA群陶器黒褐軸行平取手。上下に焼成前の径3mmの目釘穴2対。軸は褐～黒褐色不透明。胎土褐灰色。87～92は土師器。87・88は丸底坏。87は口径15.0cm。外面口縁以下は回転ケズリ後不定方向ナデ・内面は単位不明瞭な粗いケンマ。浅黄橙色。1/8残存。88は口径15.0cm。調整は87と同様。鈍い橙色。1/12残存。89～92は皿。89は口径9.8器高1.3cmで丸底。外底ナデ消しで板圧痕。浅黄橙色。1/4残存。90は口径9.2器高1.4cm。外底は回転ヘラ切り後ナデ消し。褐灰色。1/4残存。91は口径9.4器高1.2cm。外底回転ヘラ切り。鈍い黄橙色。1/8残存。92は口径9.6器高1.4cm。外底回転ヘラ切り後ナデ消しで浅い板圧痕。浅黄橙色。11世紀末～12世紀初頭を示す。

SK15 (Fig.10) SK06の6m程西、D1グリッドに位置する。方形土壙と思われ大半が調査区外に延びる。 $1.0 + \alpha \times 0.4 + \alpha \times 0.2$ mを測る。

出土遺物 (Fig.12) 93・94は土師器。93は坏。口径13.2器高2.3cm。内外回転ナデ後内底タテナデ・外底回転糸切り後板圧痕。橙色。胎土に径2mm以下の石英粒・赤色粒を含む。1/6残存。94は口径7.6器高1.4cm。内外回転ナデ・外底回転糸切り後板圧痕。鈍い黄橙色。赤色微粒を含む。1/6残存。他に瓦質土器・瓦出土。15世紀後半を示す。

SK24 (Fig.10 Ph.7) 調査区南部でSE23の西4m程、F4グリッドに位置し、SK25を切る。円形土壙で $1.3 + \alpha \times 1.3 \times 0.38$ mを測る。北半部は掘り過ぎSK25に達している。土師器壺(163)はSK25からの混入である。

出土遺物 (Fig.12) 95から98は白磁碗。95はⅢ類碗。口径15.8cm。低い玉縁口縁で軸・胎土は灰白色。残存1/10。96～98はIV類。96は口径18.4cm。軸・胎土は灰白色で外面上にビンホールが多い。残存1/10。97は口径15.6cm。内面見込みが段を成す。軸・胎土は灰白色。残存1/10。98は口径16.6cm。軸・胎土は灰白色で外面上にビンホールが多い。残存1/12。99・100は土師器丸底坏。機械成形後

灰白色。胎土淡灰色。1/6残存。80は高台径6.0cm。軸はオリーブがかった灰白色細かな貫入。胎土灰白色。82は0類。高台径7.6cm。体部外面に片切彫りの菊弁。腰が折れ稜をなす。軸は明オリーブ灰色細かな貫入。胎土明灰色。83は小碗で高台径4.8cm。軸は明オリーブ灰色。胎土明灰色。81・84は白磁皿。81高台付I類。口径11.2cm。軸・胎土は灰白色。1/4残存。84は0類か。口径12.8器高3.4cm。小さな削りだし高台をもつ。軸は灰白色で細かな貫入。胎土灰白色。1/2残存。85は青白磁六輪花皿。小さな削りだし高台径4.0cm。外面



Ph.7 SK24 (東から)

外面上位以下に回転削り・不定方向のナデ消し、内面は丁寧なナデ後單位不明瞭の幅広・疎らなケンマを施す。99は口径16.0器高4.4cm。内底にタテナデ・外底に板压痕。灰白～鈍い黄橙色。胎土精良。残存1/8。100は口径15.2cm。灰白～鈍い黄橙色。胎土は精良。残存1/12。101は土師器皿。口径10.2器高1.1cm。内外面に回転ナデ・外底は回転ヘラ切り後ナデ消し。灰白を呈し胎土は精良。残存1/4。11世紀末～12世紀初頭を示す。

(3) 溝 調査区東端のA4グリッドでSD37・38の2条検出した。交差部を杭で搅乱されるが、矩形で一体の区画溝と思われる。

SD37 (Fig.10) A4グリッドで南北方向にN-7°-Eに方位を取る。幅40深さ6cmの小溝。

出土遺物 (Fig.13 Ph.41) 102は白磁IV類碗。口径15.4cm。外面口縁下が段を成す。釉はオリーブがかかった灰白色。胎土灰白色。1/6残存。103～104は土師器皿。外底は回転糸切り。103は底径6.3cm。鈍い橙色。104は底径5.8cm。鈍い橙色。105は底径6.2cm。鈍い橙色。いずれも口縁を打ち欠き瓦玉に転用。106は土師器妻脣部片転用の瓦玉。28×30×7mm・7.6gを測る。周縁を打ち欠きで円形に形成。107は石英製の円盤。42×45×13mm・28.8gを測る。周縁を敲打で円形に形成。他に陶器妻・瓦出土。12世紀後半。

SD38 (Fig.10) A4グリッドでSD37の直交方向にN-84°-Eに方位を取る。幅40深さ5cmの小溝。遺物は白磁碗・土師器妻・坏・皿が出土する。坏・皿はいずれも糸切り。SD30と同時期と考えられる。

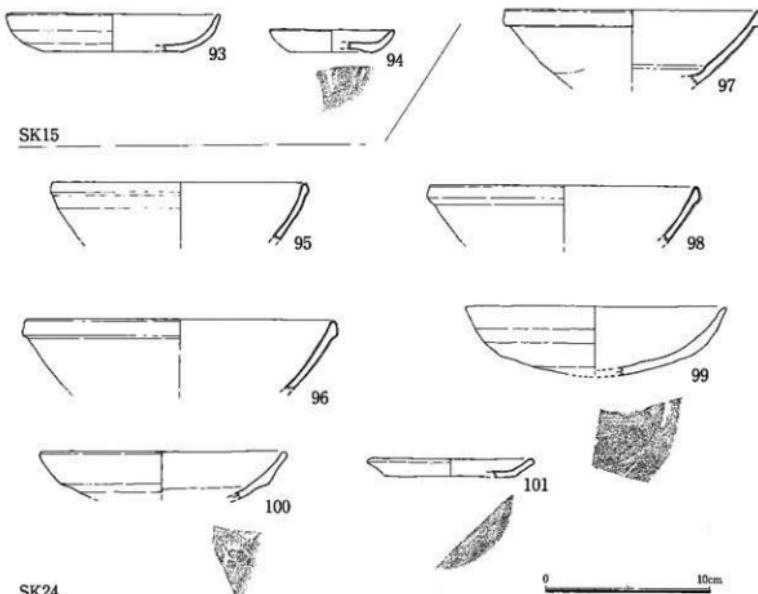


Fig.12 SK15・24出土遺物実測図 (1/3)

2). 古代の調査 古代の遺構は北東部に竪穴住居状の土壙SK02が1基・溝SD08が1条、南部に土壙SK02が1基・水溜状遺構SX26・28の2基が分布するのみで、希薄である。

(1). 水溜状遺構SX26・28 (Fig.14 Ph.8・9) SX26は調査区南東部E4グリッドに位置しSK21・SE23に切られる。方形の土壙で東部は調査区外に延びる。 $2.5 + \alpha \times 2.7 + \alpha$ m深さ46cmを測る。断面は浅い船底状で、全面を厚さ3~2cmの三和土(淡緑灰色混砂土)で覆い固く締まる。上面にはマンガンが沈殿する。覆土は灰色混砂粘質土で下面に砂の堆積は無く水が滞留した状態ではない。覆土中からは須恵器等が検出される。三和土下の柱穴は以前のものである。

SX28もこれに連なる土壙で $0.75 \times 0.43 \times 0.26$ mを測り、三和土で覆われる。

出土遺物 (Fig.15 Ph.41) 108~114は須恵器。108・110は坏蓋。108は口径14.4cm。口唇にカキメ工具痕。外黒灰・内黄灰色。1/10残存。109は口径11.4cm。暗灰色。1/12残存。108は口径14.4cm。外黒灰・内黄灰色。1/10残存。110は口径15.4cm。外面にヘラ記号。黄灰色。1/10残存。111~114は高台坏。111は口径13.0器高4.0cm。内底にタテナデ。灰色。1/4残存。112は口径12.6器高3.4cm。内底にタテナデ・高台内に簀の子状圧痕。外灰・内暗灰色。ほぼ完形。113は口径14.4器高5.2cm。灰色。1/4残存。114は小坏。口径9.0器高3.7cm。高台は底部端、黒灰~暗灰色。2/3残存。115~122は土師器。115~117は坏蓋。115は口径20.4cm。外外面に疎らなヨコケンマ。外鈍い橙・内浅黄橙色。1/10残存。116は口径18.8cm。摩滅で調整不明。浅黄橙色。1/12残存。117は口径17.4cm。外外面に疎らなヨコケンマ。橙色。1/10残存。118は坏。口径17.4cm。外面に疎らな内面に密なヨコケンマ。橙色。胎土は精良。1/12残存。119・120は高台坏。119は高台径14.2cm。摩滅で調整不明。外橙色・内鈍い橙色。1/8残存。120は高台径14.0cm。摩滅で調整不明。鈍い橙色。1/6残存。121は甌。口径30.4cm。口縁外面タテハケ後ナデ消し・内面ヨコハケ。頸部以下外面タテ



Ph.8 SX26 (西から)



Ph.9 SX26土層断面 (西から)

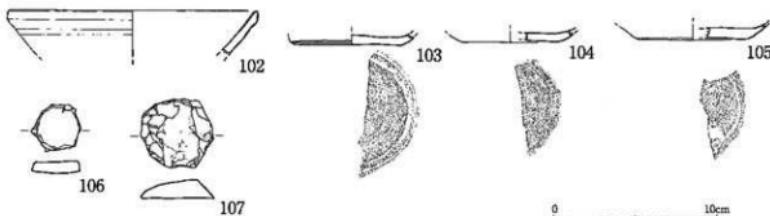


Fig.13 SD37出土遺物実測図 (1/3)

ハケ・内面ヨコ・ナナメの粗いケズリ。洞内面下位に炭化物薄く付着。外鈍い黄橙～灰白色・内明褐灰色。2/5残存。122は内径30cm程の竈開口部小片。焚口周縁の底は矩形の基部のみ残る。外面はタテハケ後粗いナデ・内面は粗いヨコケズリ。鈍い橙色・断面暗灰色。123は丸瓦端部。厚1.6～2.1cm。外面ナデ。やや軟質で外面灰白・内面褐灰色。124は鉄製刀子片。残存4.8cm・刀身で13×6mm・中茎で7×4mm。125～127は自然礫を用いた磨石で磨面が光沢をもつ。それぞれ37×20×8mm 7.5g・34×17×11mm9.4g・49×57×9mm43.3g。125・127は頁岩質細粒砂岩・126は珪質岩。8世紀前半が主体を成す。

(2). 土壌 調査区北東部に堅穴住居状の土壤SK02、南部に土壤SK21の2基が分布する。

SK02 (Fig.14 Ph.10) A2グリッドに位置する。平面長方形で大半が調査区外に延びる。 $1.82 \times 1.66 + \alpha \times 0.30$ mを測る。壁に沿って径52～65cm・深さ50～65cmの2つの柱穴をもつ。覆土は暗褐色混土砂で包含層と同様。小型の堅穴住居の可能性がある。

出土遺物 (Fig.16) 128～130は須恵器。128・129は壺蓋。128は摘付き。摘径3.0cm。天井部

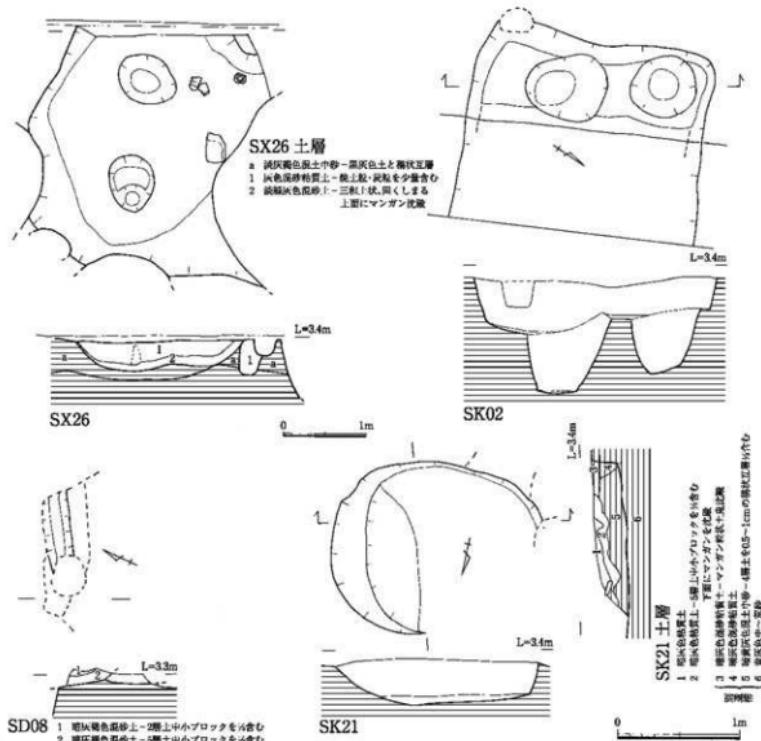


Fig.14 SX26 (1/60) · SK02 · 21 · SD08実測図 (1/40)

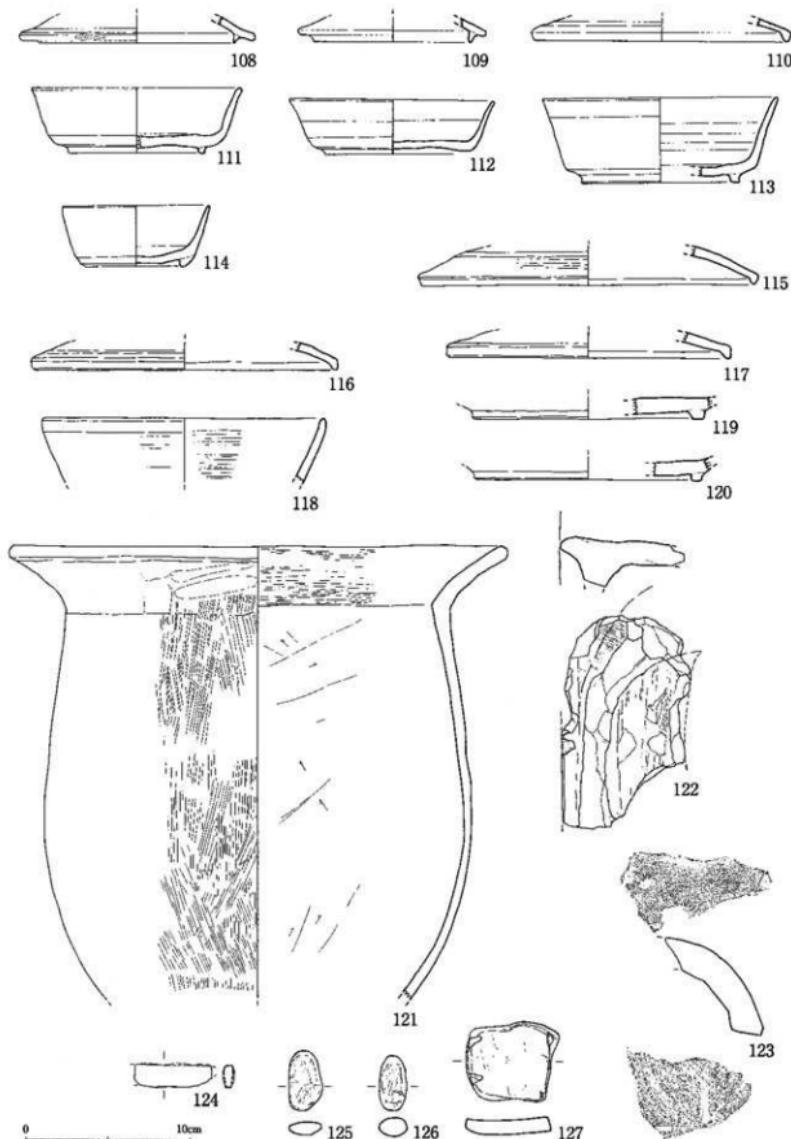


Fig.15 SX26出土遺物実測図 (1/3)

回転ケズリ・内面回転ナデ後中央をタテナデ。鈍い赤褐色。129は口径12.4cm。内外回転ナデ後天井部は回転ケズリ・内面中央をタテナデ。暗灰色。1/4残存。130は直口壺。口径19.0cm。内外回転ナデ。口唇内面に段。暗灰色で外面に自然釉。1/8残存。131・132は土師器。131は坏。外面は密なヨコケンマ・内面は暗文風の疎らなタテケンマ。外明赤褐・内橙色。残存1/10。132は壺。口径28.0cm。口縁外面粗いヨコハケ後ヨコナデ・内面粗いヨコハケ。口唇の一部に刻目。外面頸部以下にタテハケ・内面ヨコ・ナナメケズリ。外灰黄褐・内鈍い黄橙色。8世紀末～9世紀初頭を示す。

SK21 (Fig.14 Ph.11・12) E3グリッドに位置し、SX26・28を切る。平面楕円形  $1.75 \times 1.40 \times 0.20$ mを測る。北西部は搅乱に切られ遺存しない。底面は下層の遺構・包含層を掘り過ぎている。覆土は暗灰色粘質土で下面にマンガンが沈殿し、SX26・28に似る。



Ph.10 SK02 (南西から)



Ph.11 SK21土層断面 (南西から)



Ph.12 SK21 (南西から)

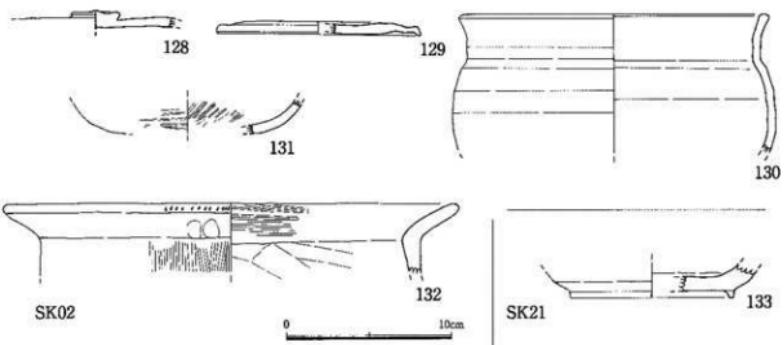


Fig.16 SK02・21出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.16 Ph.41) 13は須恵器壺。高台径10.0cm。底部端に付く。8世紀後半。

(3). 溝 SD08 (Fig.14 Ph.13) B1グリッドに位置しSK09を切る。幅23深さ14cmの小溝。N=62° Eに方位をとりSK02に並行する。

### 3). 古墳時代後期の調査

古墳時代後期の遺構は土壙のみで北半部でSK11、南半部でSK20・22の3基が分布し、南半部にまとまる。

(1). 土壙 SK11 (Fig.17 Ph.14) SK11は調査区北東部B3グリッドに位置しSD27を切る。平面梢円形の土壙で東部は調査区外に延びる。1.67+ $\alpha$ ×1.15m深さ33cmを測る。遺物は須恵器壺・土師器壺・坏等が少量出土。6世紀前半か。



Ph.13 SD08 (左) · SK09断面 (南西から)

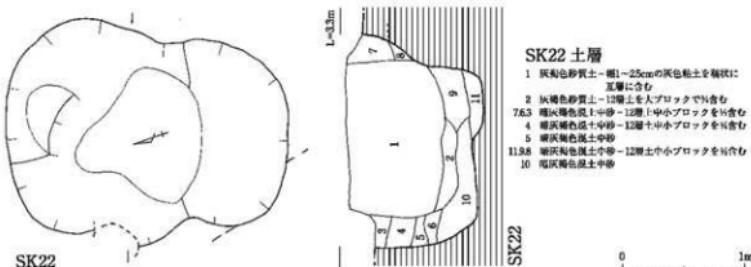
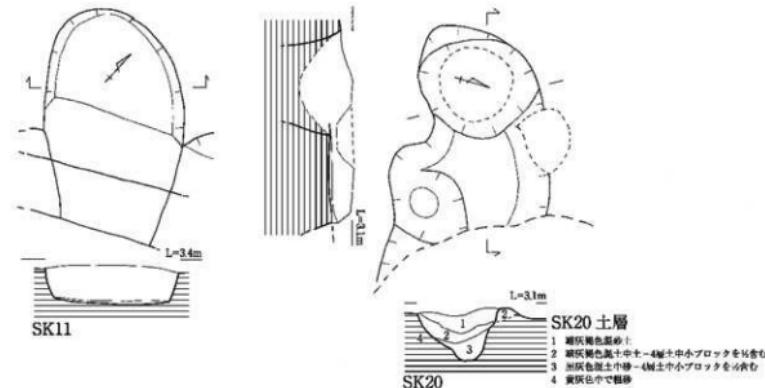


Fig.17 SK11 · 20 · 22実測図 (1/40)

SK20 (Fig.17 Ph.15・16) D3グリッドに位置しSK19と杭に切られる。平面不整形の土壌で1.8+ $\alpha$ ×1.3m深さ43cmを測る。上面に暗灰褐色土・底面に黒灰色混土砂が堆積するが、西部底面を掘り過ぎている。

出土遺物 (Fig.18) 134はSD27からの混入の弥生終末期の甕。135は軟質土器表の小片。外面にやや粗い格子目タタキ・内面に平行弧の当具痕。褐灰色。他に須恵器数片が出土。6世紀前半か。

SK22 (Fig.17 Ph.17・18) E4グリッドでSK24・25等と切りあう。平面隅丸方形の土壌で2.3×1.7



Ph.14 SK11 (北西から)



Ph.15 SK20土層断面 (北東から)



Ph.16 SK20 (南西から)

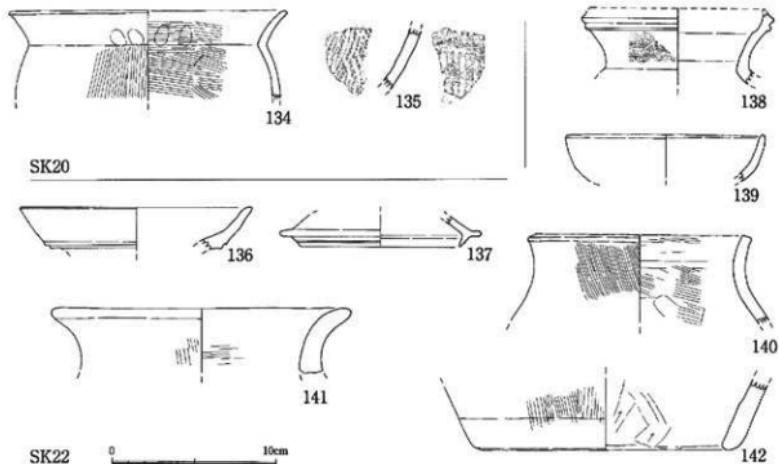


Fig.18 SK20・22出土遺物実測図 (1/3)

m深さ112cmを測る。客土で埋め戻し後、一度再掘し風成砂・土で埋没する。

出土遺物 (Fig.18) 136~138は須恵器。136は縁部。口径14.2cm。外面口縁下に小突帯を1条施す。外面暗灰・内面著しい灰被りで暗灰～暗黄灰色。2mm以下の砂粒を若干含む。残存1/6。137は壺蓋。口径12.4cm。内外面回転ナデ・暗灰色。2mm以下の砂粒を若干含む。残存1/6。138は壺口縁。口径10.6cm。口唇内端が延び外面口縁下に突帯1条を施す。内外面回転ナデ後、外面頸部にヘラ記号・内面頸部下にしづり痕。暗灰色。断面紫灰色。2mm以下の砂粒を少量含む。残存1/4。139～142は土師器。139は壺。口径12.2cm。内外面ヨコナデ。橙～鈍い赤褐色・砂粒を若干含む。残存1/10。141は甕。口径18.4cm。外面タテハケ・内面ヨコハケ後、内外面ヨコナデ消し。褐灰色。2.5mm以下の砂粒を少量・赤色粒も若干含む。残存1/10。142は直口甕。底径16.6cm。外面タテハケ・内面ナナメケズリ後内外端部をヨコナデ消し・鈍い橙色。粗い砂粒を多量に含む。残存1/8。140はSK36から混入の弥生終末期直口壺・口径13.8cm。外面ナナメハケ・内面ヨコハケ後口縁内外にゆるいヨコナデ。1/4残存。6世紀前半。



Ph.17 SK22土層断面（南から）



Ph.18 SK22（西から）

#### 4). 弥生終末～古墳時代前期の調査

弥生終末～古墳時代前期の遺構は土壙のみで、南部でSK25・北半部でSK01・05・07・09・10・12・13・16～18の10基・計11基が分布する。北半部にまとまりがあり、中心を成す時期である。

(1). 土壙 SK01 (Fig.19) A2グリッドに位置する平面楕円形の小土壙で北部を搅乱に切られる。1.08×0.53+ $\alpha$ m深さ8cm・68cmを測る二重土壙で深い。SK09を切る。

出土遺物 (Fig.20) 143は二重口縁壺。口径23.8cm。内外ヨコハケ後ヨコナデ消し・口唇は面取りし内端が若干突出。浅黄橙～明褐灰色。1/10残存。他に布留式系の甕等が出土。前期前半。

SK05 (Fig.19 Ph.19) B2グリッドに位置する平面隅丸長方形の土壙でSK04に切られる。2.0+ $\alpha$ ×1.45m深さ18cmと浅い。底面は平坦。遺物は布留式系の甕の小片が出土。前期前半。

SK07 (Fig.19) B1グリッドに位置する楕円



Ph.19 SK05（南西から）

形の小土壙でSK09を切る。1.06×0.78m深さ10cmを測る浅い土壙で客土で埋められる。布留式系の甕等が出土。前期前半。

SK09 (Fig.19) B1グリッドに位置する浅い土壙で、大半をSK09・SD08・搅乱に切られる。堅穴住居の可能性もある。床面は砂混じりの暗茶褐色土で客土する。深さ10cm。

出土遺物 (Fig.20) 144は布留式系甕口縁片。内外ヨコナデ・口唇は面取りし内端が若干突出。暗灰褐色。砂粒を多く含む。145は口縁が直線的に延び外面ヨコナデ・内面ヨコハケ後ヨコナデ消し・口唇内外が突出し外端は玉縁状。黄灰～浅黄橙色。146は高坏屈曲部。口縁外面はヨコハケ後ヨ

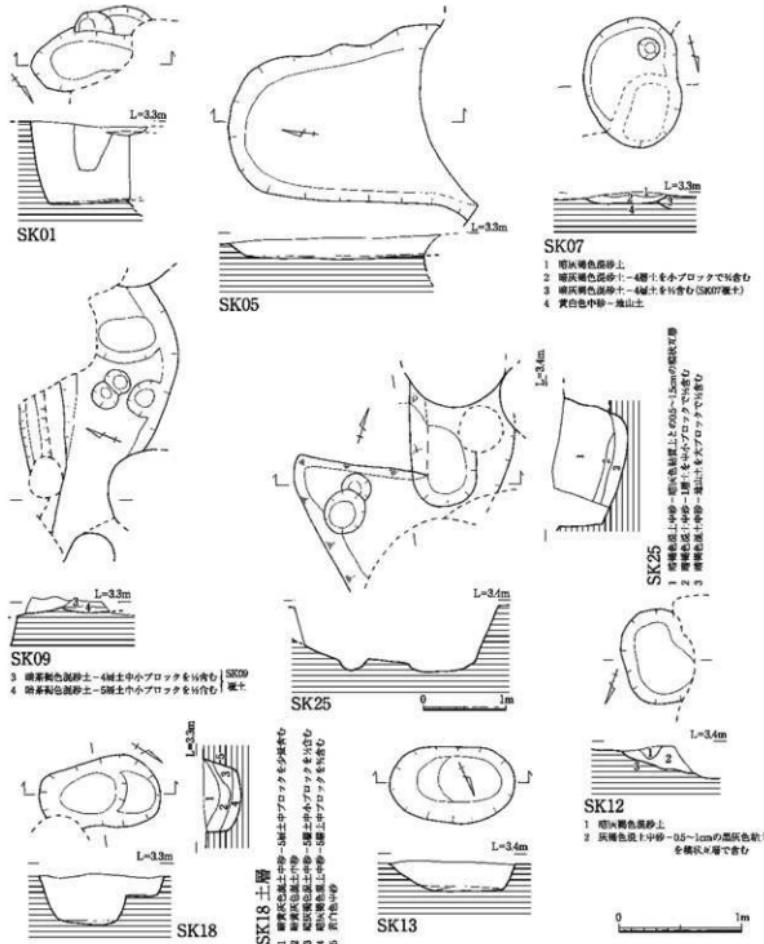


Fig.19 SK01・05・07・09・12・13・18 (1/40) · 25実測図 (1/60)

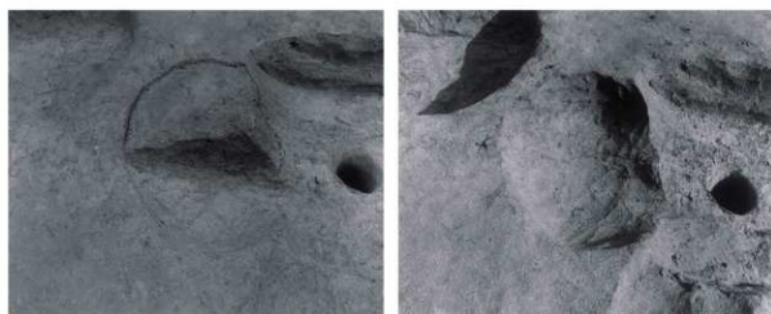
コナデ消し・内面ナナメハケ後タテヘラナデ・体部外面ヨコハケ後ナデ消し。外面黄灰内面鈍い橙色。1/10残存。147は埴胴部。外面ヨコナデ後以下にケズリ様のタテハケ・内面ヨコハケ後タテナデ・接合痕が残る。148は鉤状の鉄製釘か。全長87・頭部19×17・中位7×7mmの方形。前期前半。

SK12 (Fig.19 Ph.20・21) B3グリッドに位置し、SD27上に乗り西部を攪乱に切られる。梢円形の小土塊で $0.78 \times 0.55 + \alpha$ m深さ18cmを測る。底面から大半が風成砂で埋没する。

出土遺物 (Fig.20) 149は埴。口径13.4cm。口縁外面上位から内面はヨコハケ後ヨコナデ消し・外面口縁以下はタテハケ後ヨコナデ消し胴下半にヨコケズリ後粗いヘラナデを施す。橙～鈍い橙色。1/8残存。他に布留式系の甕・鉄片等が出土。前期前半。

SK13 (Fig.19 Ph.22) C3グリッドに位置し、SD27上に乗る。梢円形の小土塊で $1.03 \times 0.63$ m深さ25cmを測る。断面は船底形。

出土遺物 (Fig.20) 150は甕口縁小片。外面はタテハケ後ヨコナデ消し・内面はナナメハケ後



Ph.20 SK12 土層断面 (北西から)

Ph.21 SK12 (北西から)

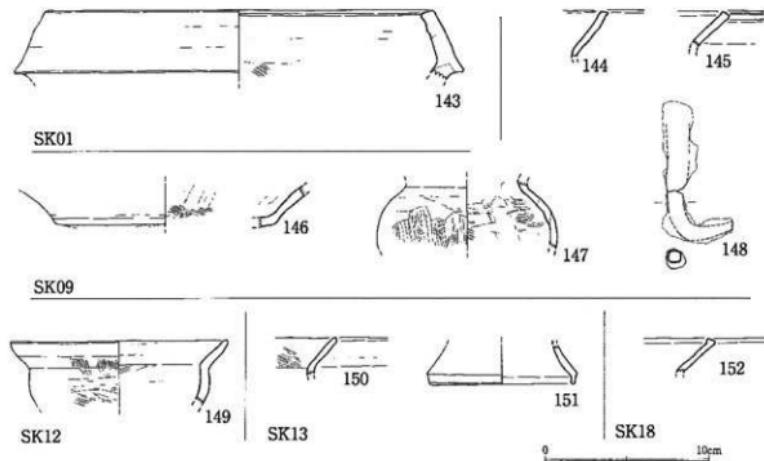


Fig.20 SK01・09・12・13・18出土遺物実測図 (1/3)

緩いヨコナデ・頸部下はケズリ後ナデ。暗灰色。砂粒を少量含む。151は端部が屈曲し二重となる小型器台の脚。径9.0cm。外面タテハケ後ヨコナデ消し疎らなヨコケンマ・内面ヨコナデ。灰褐色。胎土精良。1/12残存。前期前半。

SK18 (Fig.19 Ph.23・24) D2グリッドに位置し、SD27を切る。平面梢円形で1.0×0.6m深さ14cm・42cmを測る二重土壙。底面は5cm程埋め戻される。

出土遺物 (Fig.20) 152は庄内式系の甕口縁小片。外面ヨコナデ・内面頸部下はタテナデ・口唇面取りで内端部が突出。鈍い黄褐色。砂粒を少量含む。他に布留式系甕・坏等が出土。前期前半。

SK25 (Fig.19 Ph.25) 調査区南端のF4グリッドに位置し、SK22・24・搅乱に切られ全容は不明。幅2.7m以上深さ85cmの大型土壙で底面は25cm程埋め戻され、上面まで風成砂で埋まる。

出土遺物 (Fig.20 Ph.35) 153は袋状口縁小甕。外タテハケ後緩いヨコナデケンマ内ヨコハケ・口唇内外ナデ消し。褐灰色。154は壇。外タテハケ後口縁ナデ消し・口縁内にヨコハケ後緩いヨコナデ。灰褐色。155は坏。外ヨコハケ後ヨコナデ消し・内ヨコナデ後疎らなタテケンマ。鈍い橙色。灰褐色。156は鉢。内タテハケ後外上位と内に緩いヨコナデ・口唇ハケ工具の面取り。外黄灰～鈍い橙色・内暗黄灰～黒灰色。157は器壁が厚い外来系二重口縁甕。粗い調整で外体部にナナメハケ後全体に緩いヨコナデ・煤付着。口縁内にヨコハケ後ヨコナデ消し・頸部下にナナメケズリ。外褐灰～鈍い橙色・内褐灰～黒灰色。158は在地甕。外粗いタテハケ後口縁に緩いヨコナデ胴上位に細かなタテハケ煤付着。内口縁にヨコハケ後に緩いヨコナデ・頸部下にナナメハケ・以下にナナメ板ナデ。外褐灰・内上半黄灰・下半褐灰色。

159は近畿式系甕。外口縁粗いタテハケ・体部ヨコハケ・煤付着。内は粗いヨコ・ナナメハケ後に口縁に緩いヨコナデ。外褐灰・内鈍い黄褐色。

160是在地甕。外タテハケ後ヨコナデ消し・内口縁にヨコハケ後に緩いヨコナデ・頸部下にナナメケズリ口唇にハケ工具の面取り。外褐灰・内暗灰褐色。161は鉄錠中茎か。上端で7×7下位で5×5mmの方形。162は弥生終末期支脚。外粗いタテハケ・内タテユビナデ。被熱で内面が爆ぜる。外灰黄褐・内赤褐～暗褐色。163～167はSK24混入資料。163は直口甕。口縁外に



Ph.22 SK13 (東から)



Ph.23 SK18土層断面 (北西から)



Ph.24 SK18 (北西から)

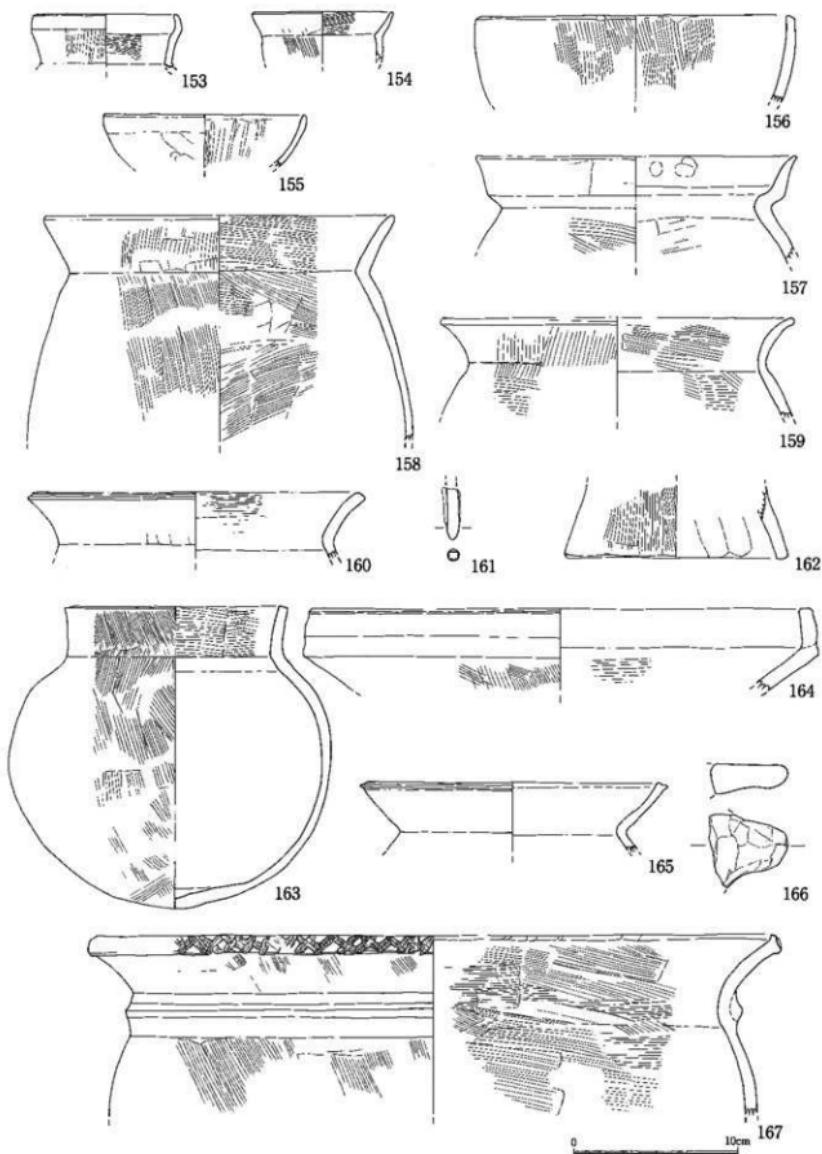


Fig.21 SK25出土遺物実測図 (1/3)

細かなタテハケ以下に粗いタテハケ後全体に緩いヨコナデ口唇ハケ工具で面取り・内口縁にヨコハケ以下にケズリ後ヨコナデ・頸部下は接合痕。底部が小さく若干突出する。外黄灰～灰白・内灰白～暗赤橙色。ほぼ完形。164は在地の二重口縁大壺。口縁内外ヨコナデ・口唇面取り・頸部外粗いナナメハケ・内粗いヨコハケ後ヨコナデ。内外鈍い橙色。165は布留式系甕。内外面ヨコナデ・口唇は面取りし両端部が若干突出。内頸部下はケズリ後ナデ。暗黄灰～黒褐色。166は軟質系土器の把手。板状で $4.9 \times 4.3 \times 1.4$ cm。全面ナデで上面は平坦・下面は弧状。褐灰色。167は在地の大甕。外粗いナナメハケ後頸部に低い突帶1条直下に沈線1条・口頸部にヨコナデ・口唇は面取りしハケ工具の十字刻み両端が突出。内粗いヨコハケ。赤褐色。弥生終末期を含むが時期は前期前半。



Fig.22 下面遺構全体図 (1/100)

### 3. 下面の調査 (Fig.22 Ph.26)

下面の調査は、基盤層が露出している北半部では、切り合いの遺構を除去した状態で大溝SD27とSK29の調査を、暗褐色砂質土の包含層が20cm程遺存する南半部ではこれを除去した基盤層上で、古代の土壌1基・古墳後期の土壌1基、古墳前期の土壌3基・溝1条・井戸1基、弥生終末期の土壌2基を検出した。古墳前期が主体をなす。いずれも搅乱と上面遺構からの掘削で切られ、遺構の全体を知れるものは少ない。



Ph.25 SK25土層断面（南東から）

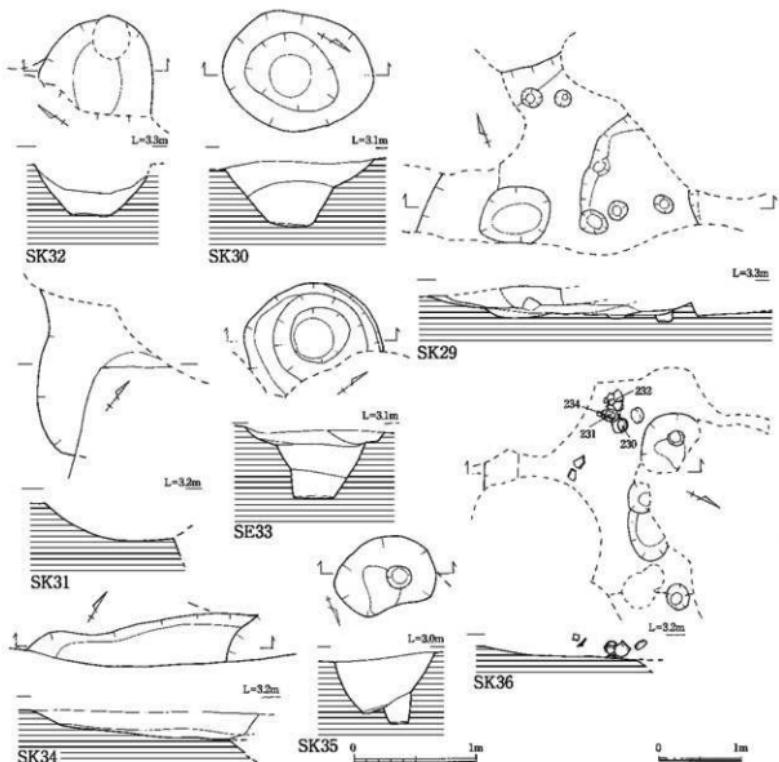


Fig.23 SK30・31・32・34・35 (1/40) ・29・36・SE33実測図 (1/60)

1). 古代の調査 古代の遺構は調査区南半部に土壙が1基分布するのみで、上面でのおもだった分布域と重なる。

(1). 土壙SK35 (Fig.23) F4グリッドに位置し、SK36を切り遺構の大半をSK22に切られる。

平面円形で径 $0.78 \times 0.6m + \alpha$  深さ40cmを測る。底面隅に径23深さ13cmの柱穴があり、柱穴掘方の可能性もある。

出土遺物 (Fig.24) 170・171は須恵器。170は坏蓋で口径14.4cm。内外面回転ナデ。外面自然釉で黒灰色・内面灰色。胎土は精良。1/10残存。171は高台坏の高台。高台径10.0cm。外面端部が張り出し時期的には古い。全面回転ナデ。疊付に浅い簀の子状圧痕。黒灰色。胎土精良。1/6残存。他には土師器の甕・壺・坏小片が出土。8世紀末～9世紀初頭。



Ph.26 下面全景 (南西から)

2). 古墳後期の調査 古墳後期の遺構は調査区南半部に土壙が1基分布するのみで、これも上面でのおもだった分布域と重なる。

(1). 土壙SK32 (Fig.23 Ph.27) E4グリッドに位置し、遺構の大半をSK22に切られる。平面円形で径 $0.95 \times 0.8m + \alpha$  深さ42cmを測る。断面船底形。

出土遺物 (Fig.24) 172は須恵器坏身。内外回転ナデで外面下位は左回転ケズリ。底面にヘラ記号を記す。内面上位には回転ヘラ当て痕が残る。外面は鈍い赤褐色・内面は鈍い橙色を呈し硬質赤焼けの状態で還元焼成までにいたっていない。胎土は2mm以下の砂粒を少量含む。他に土師器甕・坏小片出土。6世紀末～7世紀初頭を示す。



Ph.27 SK32 (北西から)

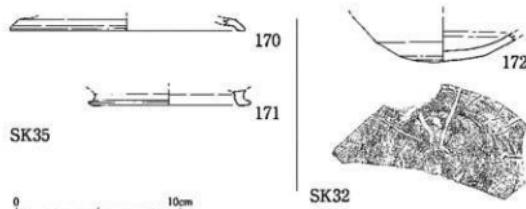


Fig.24 SK32・35出土遺物実測図 (1/3)

### 3). 弥生終末～古墳前期の調査

弥生終末～古墳前期の遺構は、調査区北半部に土壙SK29・大溝SD27が、南半部で土壙SK30・31・34・36の4基・井戸SE33の1基が分布する。SK29・34・36は竪穴住居の可能性もある。南北方向に整列する様に見えるが、搅乱と上面遺構からの削平の結果で、上面検出遺構と重ねると全面的に分布する、中心を成す時期である。

(1). 大溝SD27 (Fig.25 Ph.28) B・C-2・3  
グリッドに位置し、SK36を切る大溝で幅5.5m 前後深さ1.05mを測る。端部の検出で主体は東の調査区外に延びる。N-55° -Wに方位を取り、この直交方向の端部を北側に深さ35~40cmの3段に掘り下げ昇降口としている。70cm程埋没後(5層下面)と90cm程埋没後(3層下面)の2度、幅2m程に縮小して南寄りに改削している。方形周溝墓の周溝の一部と考えると、以上のことから墳丘は南西に広がる可能が高い。

出土遺物 (Fig.26・27 Ph.36) Fig.26は上層(1~3層)出土遺物。173~176は埴。173は外上半ヨコナデ下半ケズリ後ナデ・内上半ヨ



Ph.28 SD27 (南西から)

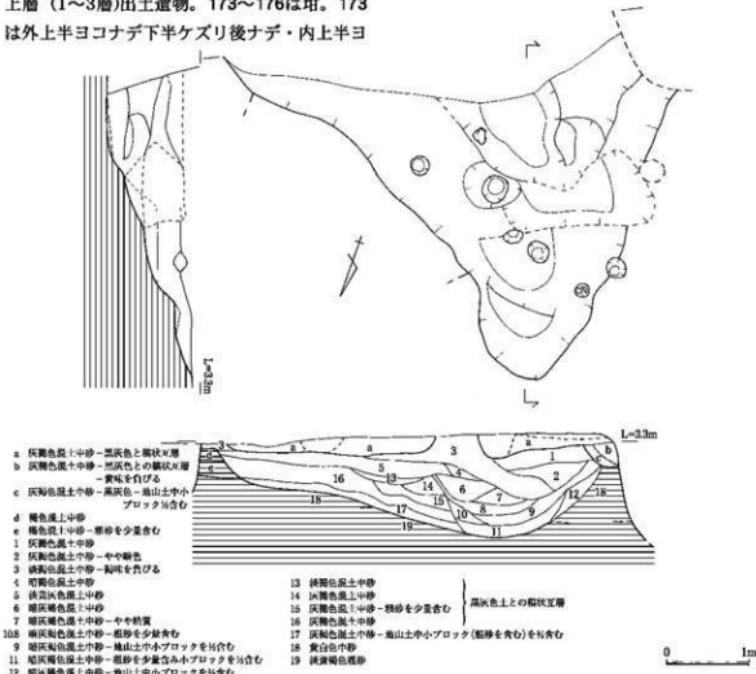


Fig.25 SD27実測図 (1/60)

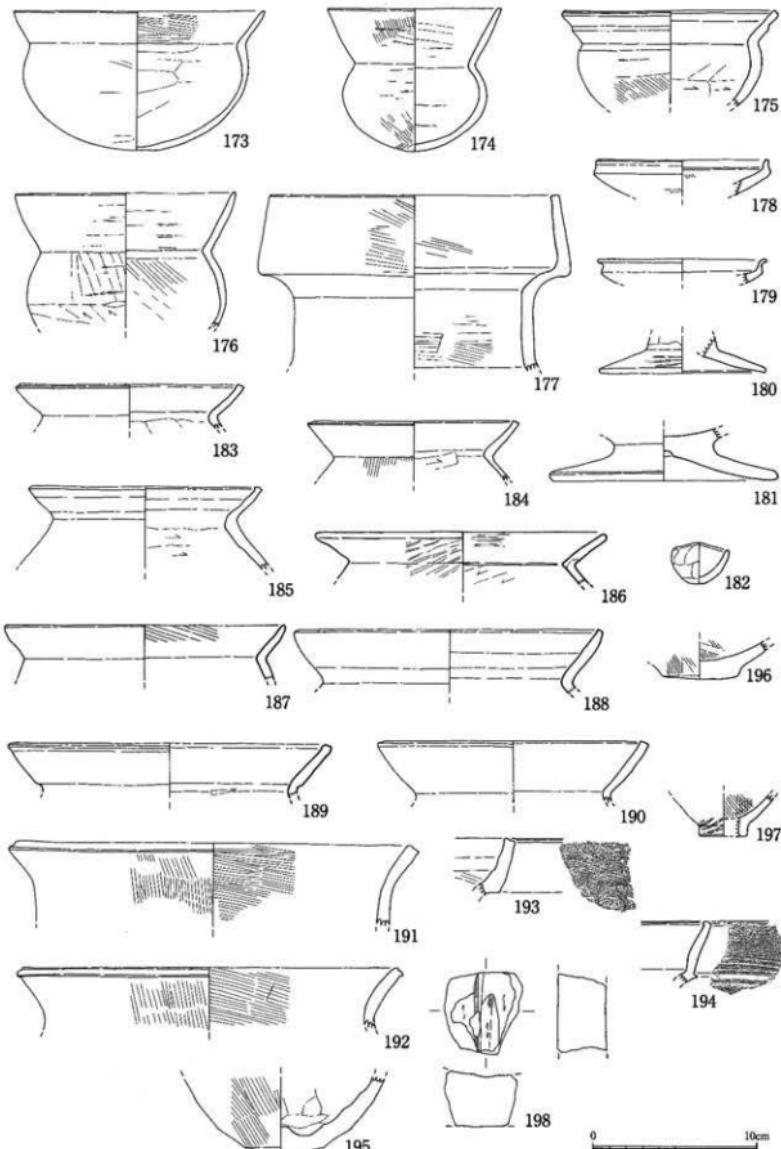


Fig.26 SD27上層出土遺物実測図 (1/3)

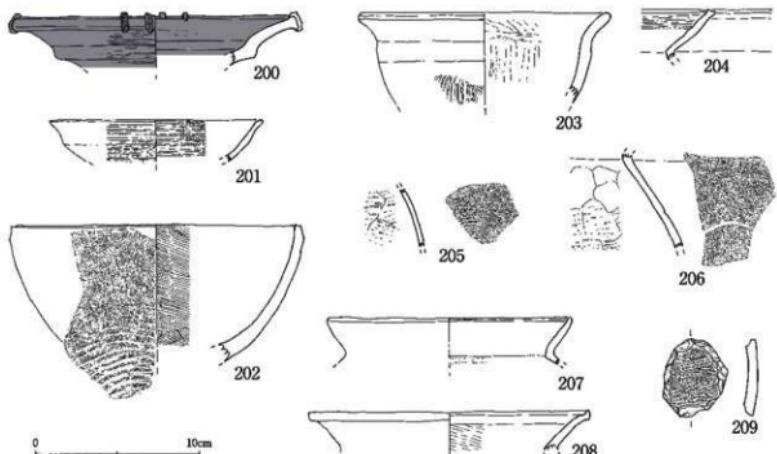


Fig.27 SD27下層出土遺物実測図 (1/3)

コナナメハケ後緩いヨコナデ下半ヨコケズリ後ヨコナデ。174は外口縁タテハケ後ヨコナデ疎らなヨコケンマ胴上位ヨコハケ後ヨコナデ後疎らなヨコケンマ以下ケズリ後ナデ疎らなタテケンマ・内ヨコナデ後疎らなヨコケンマ。175は口縁外面が段を成し口唇に沈線内端が突出。上半ヨコハケ後ヨコナデ下半ナナメハケ・内上半ヨコハケ後ヨコナデ下半ヨコナデ後緩いケンマ。176は外口縁ヨコナデ後緩いケンマ胴上半タタキ下半ケズリ後ヨコナデ緩いケンマナデ・内口縁ヨコハケ後ヨコナデ胴上半ナナメハケ下半ケズリ後緩いヨコナデ。177は外来系の二重口縁壺。口縁外面ヨコナナメハケ以下不明・内ヨコナナメハケ。178・179は庄式系小形器台。178は外ヨコナデ後ヨコケンマ・内上半ヨコケンマ下半疎らなタテケンマ。179は調整不明。180は近畿系高環脚。内外ヨコナデ後疎らなヨコケンマ。181は山陰系低脚壺の脚。内外ヨコナデ後緩いケンマ。182は手握ね土器。口縁外面ケズリ後ナデ。183～197は甕。183～185は布留式系。183は口縁内外ヨコナデ口唇面取りで内端が突出・胴外面ヨコハケ後ヨコナデ内頸部下ケズリ。184は口縁内外ヨコナデ口唇面取りで内端が若干突出・胴外面タテハケ後緩いヨコナデ内頸部下ケズリ。185は口縁外ヨコナデ口唇面取りで内端が突出・口縁内ヨコヘラナデ後ヨコナデ頸部下ケズリ。186は庄内系甕。外ナナメタタキ後ヨコナデ内口縁ヨコハケ後ヨコナデ頸部下ケズリ。187は外ヨコナデ後緩いケンマ・内口縁粗いナナメハケ後下半をナデ消し頸部下ヨコナデ後緩いケンマ。188は布留式系。口縁外面ヨコハケ後ヨコナデ消し口唇面取りで内端が若干突出・内ヨコヘラナデ後ヨコナデ。189は口縁内外ヨコナデ口唇面取りで両端が突出・内頸部下ケズリ後ナデ。外煤付着。190は布留式系。口縁外面ヨコナデ口唇面取りで両端が若干突出・外面煤付着。191・192は在地。191は外タテハケ後口縁ヨコナデ口唇面取り・内ヨコナナメハケ。192は外粗いタテハケ後緩いヨコナデ口唇面取りで外端が突出・内ナナメハケ後緩いヨコナデ。193は瀬戸内系。外ヨコハケ後ヨコナデ・ハケ工具の波状文口唇ハケ工具で段・内ナナメハケ後ヨコナデ一部ヨコケズリ。194は山陰系。外ハケ工具の6～7条の条線他はヨコナデ・口唇面取りで内端が突出。195～197は底部。195は在地。小さめのレンズ底で外タテハケ後緩いヨコナデ内ケズリ。196・197は五様式系。196は内外ナナメハケ。197は外タタキ後緩い

ヨコナデ内ナナメハケ。198は中粒砂岩製砥石。上面に2面の凹面の砥面と幅2mmの条線下面は敲打で平面に成形。厚3.4cm。Fig.27は下層出土遺物。200～202は近畿系。200は加飾壺。口径18.0cm。全面丹塗りで内外面ヨコナデ後疎らなヨコケンマ。口唇に粘土紐を縦2本貼付しハケ工具で3カ所刻む。2.5mm以下の砂粒をやや多く含む。赤～赤褐色。1/4残存。201は近畿系小形器台。外下位に板ナデ後全面に疎らなヨコケンマ内ヨコハケ後疎らなヨコ一部タテケンマ。202は鉢。外ナナメタキ後緩いヨコナデ内ナナメハケ。203は鉢。口縁径外面タテハケ後上位ヨコナデ消し内頸部下ケズリ後全面にヘラナデ。204～207は布留式系甕。外面煤付着。204は外ヨコナデ口唇両端が突出・内ヨコハケ後ヨコナデ。205は胴外面ヨコハケ後上位ヨコナデ櫛描波状文内ケズリ。206は胴外面ヨコハケ後上位緩いヨコナデ・ハケ工具の波状文内ケズリ。207は外ヨコナデ口唇内端突出内口縁ヨコハケ後ヨコナデ頸部下ケズリ。208は庄内式系甕。外ヨコナデ口唇内外端突出内ナナメハケ後ヨコナデ。209は瘦胴部片利用の土器片円盤。13g。以上祭祀土器が多く前期前葉を示す。

(2) 井戸 SE33 (Fig.23 Ph.29) 調査区南端部のE5グリッドに位置し、SE23に切られる。掘方は径1.7m深さ20cm・1.2m深さ70cmの2段掘りで井筒は遺存しないが径50cm程を測る。

出土遺物 (Fig.28 Ph.36) 210は高杯。外口縁ヨコナデ後暗文風のタテケンマ体部ナナメハケ後緩いケンマ内ヨコハケ後ヨコナデ消し暗文風のタテケンマ。211は庄内式系小形器台。ヨコハケ後ヨコナデ消し内面ヨコナデ後緩いケンマ。212は庄内式甕。外口縁ヨコナデ以下タテハケ後ヨコナデ内面ヨコハケ後緩いヨコナデ頸部下ケズリ。213は近畿系器台脚部。外ヨコナデ後疎らなヨコケンマ内端部ヨコハケ以上ヨコナデ後疎らなヨコハケ。214～216 (Ph.36) は小鉄片。3.0×2.3×0.3・1.8×0.9×0.6・2.3×1.1×0.4cm。他内面ハケ調整の土器片が多数ケズリ調整は少量である。前期初頭か。

(3) 土壌 北半部でSK29・南半部でSK30・31・34・36の4基・計5基が分布する。SK29・34・36は竪穴住居の可能性も考えられる。

SK29 (Fig.23 Ph.30) B3グリッドに位置し、大部分をSD27と搅乱に切られ全容は不明。深さ30cm程で底面は平坦であり住居の可能性もある。

出土遺物 (Fig.29) 217・218は甕。217は外面タテハケ後頸部にヨコナデ内面ヨコハケ後ナデ消し。黒褐～暗黄灰色。218は口径13.8cm。外面粗いタテハケ口唇面取り内面ヨコハケ



Ph.29 SE33 (南東から)

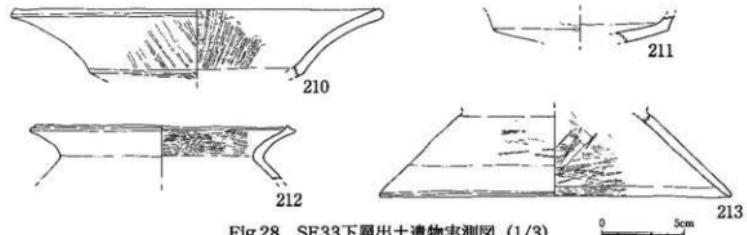


Fig.28 SE33下層出土遺物実測図 (1/3)

鈍い橙～明褐灰色。219は高坏。内外面ヨコハケ後ナデ消し暗文風タテケンマ。鈍い橙色220は二重口縁壺。口径16.6cm。口縁内外ヨコナデ外面頸部ナナメハケ煤付着。暗灰褐色。弥生終末。

SK30 (Fig.23 Ph.31) E4グリッドに位置する円形土壙で $1.22 \times 0.97$ ・ $0.78 \times 0.57$ mの2段掘りで深さ56cmを測る。

出土遺物 (Fig.29) 221は山陰系二重口縁壺。内外面ヨコナデ。鈍い橙色。222は高坏。

口径28.2cm。外面ナナメハケ後ヨコナデ暗文風タテケンマ・内面ヨコハケ後ヨコナデ暗文風タテケンマ。外面暗灰褐内面鈍い橙色。223は布



Ph.30 SK29 (北西から)

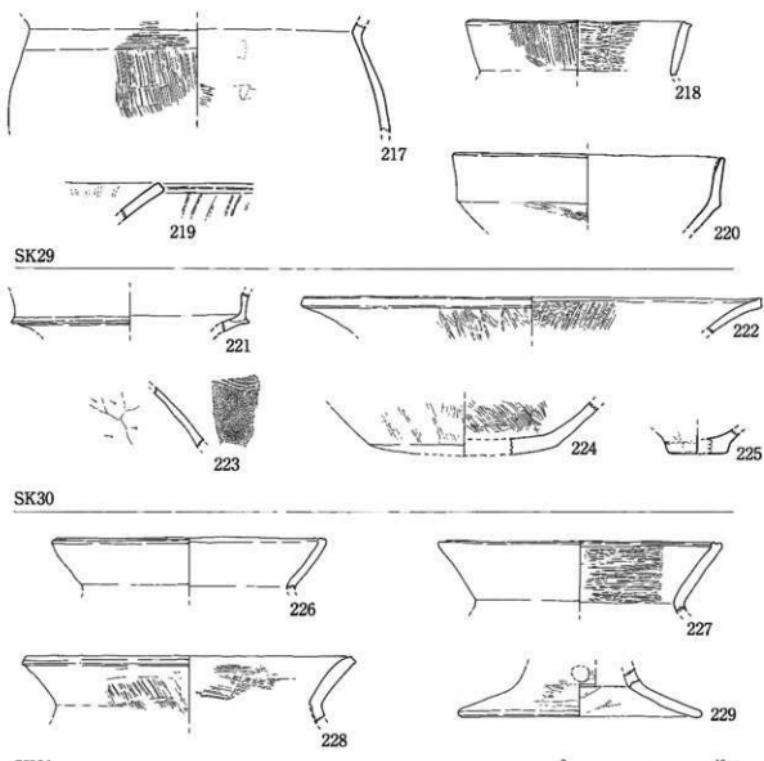


Fig.29 SK29・30・31出土遺物実測図 (1/3)

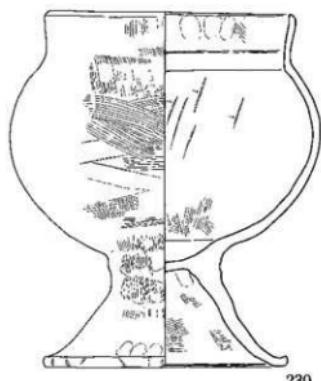
留式系壺腹部片。外面ヨコハケ後ヨコナデハケ  
工具の波状文内面ケズリ。外面灰褐内面鈍い橙  
色。224は壺底部。レンズ底で径11.8cm。外面  
タテハケ後ナデ内面ナナメハケ後緩いヨコナ  
デ。外面鈍い赤褐内面鈍い橙色。225は五様式  
系壺底部。径3.8cm。内外面ナデ。鈍い黄橙  
色。前期前半。

SK31 (Fig.23 Ph.32) D3グリッドに位置  
し、大部分を搅乱に切られ全容は不明。深さ32  
cmで断面船底型。

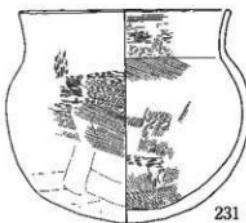
出土遺物 (Fig.29) 226は布留式系壺。口  
径16.8cm。内外面ヨコハケ後ヨコナデ。口唇面  
取りで内端が突出。褐灰色。煤付着。227は近畿系壺。口径17.4cm。外面ヨコナデ口唇面取りで内  
端が突出内面ヨコハケ後緩いヨコナデ。鈍い橙色。228は在地の壺。口径20.4cm。内外面ナナメハ  
ケ後緩いヨコナデ。口唇面取りで外端が突出。229は近畿系高坏脚。径15.0cm。外面ヨコナデ後疎



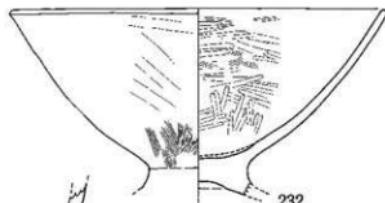
Ph.31 SK30 (北西から)



230



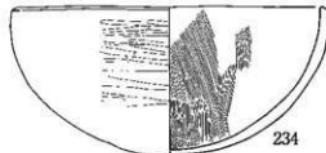
231



232



233



234

0 10cm

らなヨコケンマ内面ヨコナナメ板ナデ。円形の飾穴を3カ所穿つ。暗黄灰色。前期前半。

SK34 (Fig.23 Ph.33) 調査区南端E5グリッドに位置し、大部分は調査区外に延びSE23に切られ全容は不明。方形のコーナー深さ20cm程の平坦な底面であり住居の可能性もある。遺物は布留式系甕・壺等少量出土。前期前半。

SK36 (Fig.23 Ph.34) 調査区南部E4グリッドに位置し、SE23・33・SK35・搅乱に切られ全容は不明。幅は3.7m以上あり深さ30cm程の平坦な底面で土器も完形で集中して出土し住居の可能性が高い。

出土遺物 (Fig.30 Ph.36) すべて一箇所に集中して出土した遺物。230は脚坏壺。完形で口径14.8器高21.8cm。外面上下位はタテハケ中位にナナメハケ後緩いヨコナデ内面タテナナメハケ後中位はヨコヘラナデ全面ヨコナデ。脚内はヨコハケ後ヨコナデ。橙～鈍い橙色。231は直口壺。完形で口径13.0器高13.0cm。外面口縁はタテハケ胴上位にヨコナナメハケ後下位をケズリ全面に緩いヨコナデ内面口縁にヨコハケ後ヨコヘラナデ脚部にハケ。橙色。232は脚坏鉢。口径23.0cm。脚を円形に打ち欠く。調理に使用し器壁が荒れ外面下位はタテハケ内面ヨコナナメハケ後ヨコナデ消し粗いケンマ。内底が被熱で爆ぜる。外面鈍い赤褐内面上位橙下位黒褐色。233は甕胴部片。内外面に粗いハケ・外面突帯は粗いヨコナデ。鈍い黄橙～橙色。234は鉢で調理に使用。完形で口径19.4器高9.1cm。外面ヨコナデ後上位に粗いヨコヘラナデ内面タテハケ。外面に煤が付着し被熱する。外面灰褐～黒褐内面鈍い黄橙色。弥生終末期。



Ph.32 SK31 (西から)



Ph.33 SK34 (北から)



Ph.34 SK36 (南西から)

#### 4. 包含層出土遺物 (Fig.31 Ph.36)

Fig.31は暗褐色砂質土の包含層等を除去した、下面遺構検出時の出土遺物。235は山陰系二重口縁甕。内外ヨコナデ・頸部に煤付着。236は壠。口縁内から外面上位はヨコハケ後ヨコナデ緩いヨコケンマ・胴下位はケズリ後ヨコナデ疎らなヨコケンマ。237は山陰系の低脚鉢。脚外タテナデ・体部タテ板ナデ・体内面ヘラナデ後ヨコナデ。被熱。238は朝顔形円筒埴輪頸部。外面タテハケ後タガ部ヨコナデ・内面上位ヨコハケ中位ヨコケズリ下位ヨコハケ後

ヨコナデ。外面赤内面橙~鈍い橙色。焼成堅緻。239は鉄片。3.7×1.3×0.6cm。240・241は砥石。240は長石斑岩製。幅6.2cmの長方形に成形。厚1.8cm。上面を底面に下面は敲打で平坦に成形。側面に鋸引き痕。黄白色。241は中粒砂岩の自然礫使用。幅10.5厚3.1cm。表裏と左側面を底面に使用。凹面に転用し破損する。黄味がかった褐灰色。235・236・239はSD27上層・237はSK36・240・241はSE33の可能性がある。

## 5. 混入その他の資料 (Fig.32 Ph.36)

Fig.32は後代の造構混入や攪乱出土等の資料。242~252は混入。242は須玖Ⅱ式壺。外タテハケ内ナデ。243は弥生終末期高环脚。外タテケンマ内シボリとヨコナデ。円形の飾穴を3方。244は同期窓口縁。外口縁下タテナデ以下ヨコナデ消し・内ヨコハケ。245・246はVI期須恵器。245は坏蓋。246は坏身。247~249は埴輪片。247は形象。板状で外タテハケ後縦方向に幅3cm程の突帶を貼付し剥離。内面ナナメハケ。厚1.1cm。浅黄橙色。248は円筒。外タテハケ内ナナメハケ。上破断面を磨り面取り。厚1.2cm。橙色。249は円筒の幅2cmのタガ部分。外ヨコナデ内タテナデ。厚1.2cm。鈍い橙色。250・251は格子目タタキ瓦片。250は丸。格子内に一文字。厚1.9cm。灰色。251は平。格子内に十文字。厚3.0cm。外灰黄内浅黄橙色。252は角閃石安山岩製円盤片。周縁を交互剥離で刃部形成。厚1.0cm。253~261は攪乱出土。253~257は古式土師器。253・254は山陰系二重口縁壺。253は内外ヨコナデ・外面煤付着。褐灰色。254は内外ヨコナデ緩いケンマ・内頸部下ケズリ。灰白色。255は鼓形器台。外面ヨコナデ内面ナデ後緩いケンマ。淡赤橙色。256は器壁が厚い外来系二重口縁壺。外面口縁下端を丸く。内外ヨコナデ・鈍い橙色。257は吉備系二重口縁壺。口縁外側タテハケ後内外ヨコナデ・口縁外面に7~8条のハケ工具条線・内頸部下ケズリ。外鈍い橙内浅黄橙色。258は灰釉壺肩部片。外オリーブ灰半透明釉・内粗いヨコナデ胎明灰色。259は須恵器鉢。内外回転ナデ外面脚部に浅い沈線4条。260・262は新羅・高麗無釉陶器壺。260外平行タタキ内粗い平行当具痕。外褐灰内黒灰色。焼締め状。262は外格子目タタキ外黒灰内黒褐色。261・263・264は軟質系土師器壺。261は外木目直交平行タタキ内平行弧当具痕。外黒褐内褐灰色。263は外格子目タタキ内平行弧当具痕。外鈍い赤橙内黒褐色。264は外面木目直交平行タタキ内面細かな平行当具痕。灰褐色。

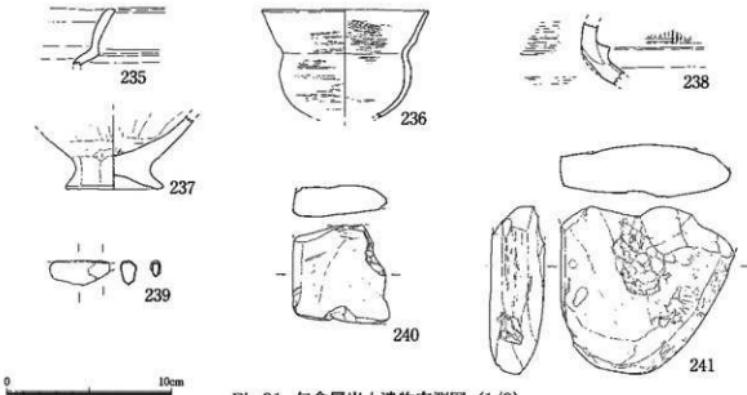


Fig.31 包含層出土遺物実測図 (1/3)

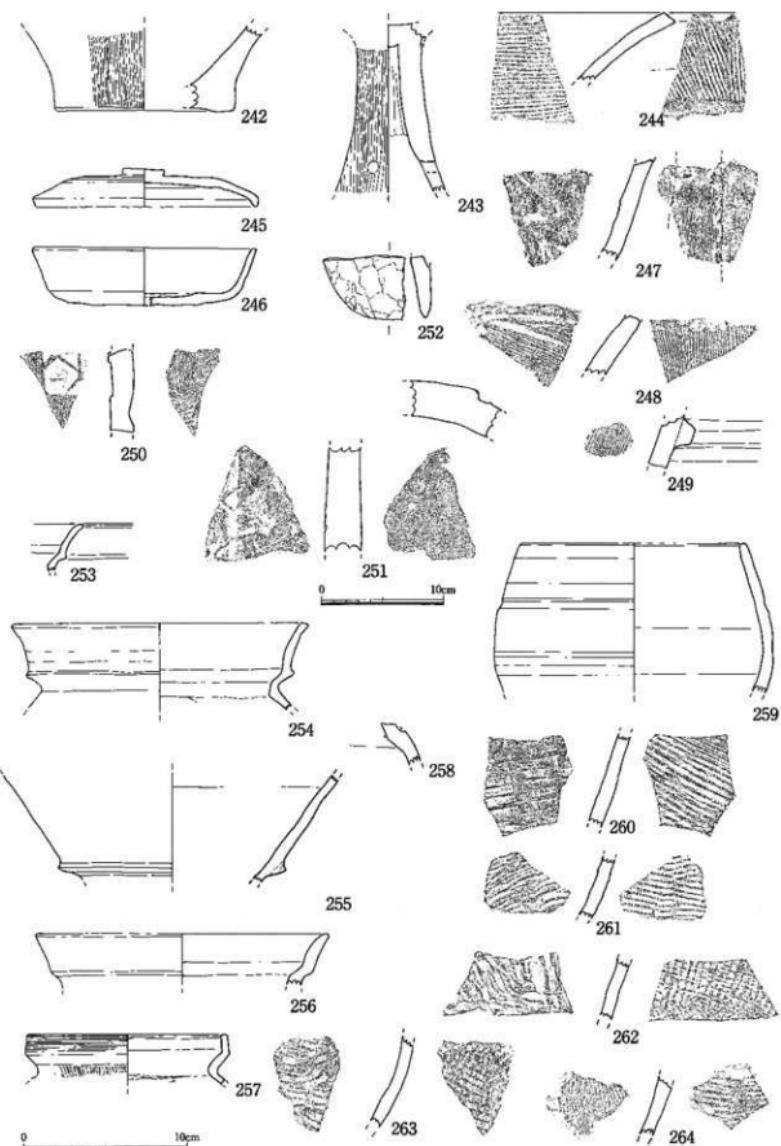


Fig.32 混入その他の資料実測図 (1/3, 250・251-1/4)



Ph.35 出土遺物.1



Ph.36 出土遺物.2

## IV. 小結

今回の調査では2面にわたって弥生終末期の堅穴住居の可能性を含む土壙2基、古墳時代初頭～前半の土壙14基・溝1条・井戸1基の計16基、古墳時代後期の土壙5基、奈良時代土壙3基・溝1条・水溜状遺構2基の計6基、11世紀末～15世紀後半土壙5基・井戸2基・溝2条の遺構を検出した。

弥生終末期は下面の南北で堅穴住居の可能性を含む土壙2基を検出した。

前半を中心とした古墳時代前期の遺構は上下面にわたって調査区全域に分布する。検出遺構の4割強を該期が占め最盛期となっている。終末期から古墳前期の集落は砂丘1列の全域に広がっており、当該区西の第172次調査区が西限となる。特筆すべきはN-55°-Wに方位をとる幅5.5mの大溝SD27で、埴・小形器台等祭祀土器の出土が目立ち、方形周溝墓の周溝の可能性も考えられる。出土土器は從来通り近畿・山陰系等の外来資料が目立ち、遺跡群の交易・先進性を示している。鉄器・鉄片も少量検出されており、900点以上の鉄器・鉄片と櫛羽口を検出し鍛冶工房と目される北東の第147次調査区は120m程の位置であり何らかの影響を受けている。井戸SE33は遺跡群内では検出例は少なく、第33次調査区では井底に木質の井筒を据えた痕跡が検出されている。

古墳時代後期は土壙5基のみで上面を中心に南部にまとまる。遺構は少なく集落の周縁に位置すると考えられるが、少量の埴輪片を検出している。埴輪を伴う古墳は現在まで第28・31次調査区検出の5世紀前葉60m級の前方後円墳（博多1号墳）・第109次調査区検出の5世紀後半24～25m級の前方後円墳（SX223-1博多2号墳？）の2基のみである。当該区周辺での埴輪の分布状況をみると、意外に東側の砂丘最高部、第150次調査区周辺では検出されず、当該区を東限とした砂丘西端部の第142次・171次・182次調査で検出されており、182次調査で報告者は5世紀後葉と推測している。北東部で博多1号・2号墳が立地する博多濱第1列砂丘の西部に位置する、当該区から西の低位部に第3の前方後円墳が存在する可能性は高い。古墳近片に方形周溝墓・鍛冶工房・玉造工房が分布する立地環境も共通している。

奈良時代は同じく上面を中心に6基の遺構を検出した。集落の中心域を示すものではないものの、SK02は堅穴住居の可能性がある。特異な遺構としては三和土を貼った水溜状遺構SX26・28を検出した。上面にマンガンが沈殿するものの堆積からは水が滞留した状況は示しておらず遺構の性格を明確にできないが、磨石が多く何かの手がかりとなりそうである。遺物も官衙的様相を示すものは少量の瓦片のみで、大きな格子目タタキを施すのも共通している。

第2の最盛期は11・12世紀で、8基の遺構が検出され、うち井戸が2基を占める。検出数では第2の最盛期であるが、遺跡群内では極めて少ない。遺構はN-9°-Eを軸とした縦横方向に並ぶ傾向にあり、方形区画溝SD37・38もこれに沿う。遺物としては製品・素材の検出は無いが使用されたガラス坩堝が12世紀初頭～前半のSE23から数点出土しており、工房が付近に存在することを示している。147次調査区からもガラス小玉・素材が出土している。時期的に北東部の第172・180次調査区が周辺域での中心で、172次調査区では多量のガラス製品・素材・坩堝が検出され、時期は12世紀代で同時期である。180次調査区では12世紀中～後半を中心としており、これに先行する。集落の周縁部に位置する、当該区周辺の様な水辺に近い区域に、鍛冶や鋳造・ガラス等火気を用いる工房が選地される傾向が高い。

## 参考文献

- 「博多 VII」— 博多遺跡群第28次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第147集1987  
「博多 X」— 博多遺跡群第31次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集1987  
「博多 11」— 博多遺跡群第33次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集1988  
「博多 71」— 博多遺跡群第109次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第628集2000  
「博多102」— 博多遺跡群第142次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第848集2005  
「博多106」— 博多遺跡群第147次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第892集2006  
「博多127」— 博多遺跡群第166次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1039集2009  
「博多129」— 博多遺跡群第171次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1041集2009  
「博多133」— 博多遺跡群第180次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1045集2009  
「博多135」— 博多遺跡群第172次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1086集2010  
「博多136」— 博多遺跡群第182次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1087集2010  
井上義也 2006「博多遺跡群出土埴輪について— 博多142次調査資料を中心として—」  
『九州考古学81号』

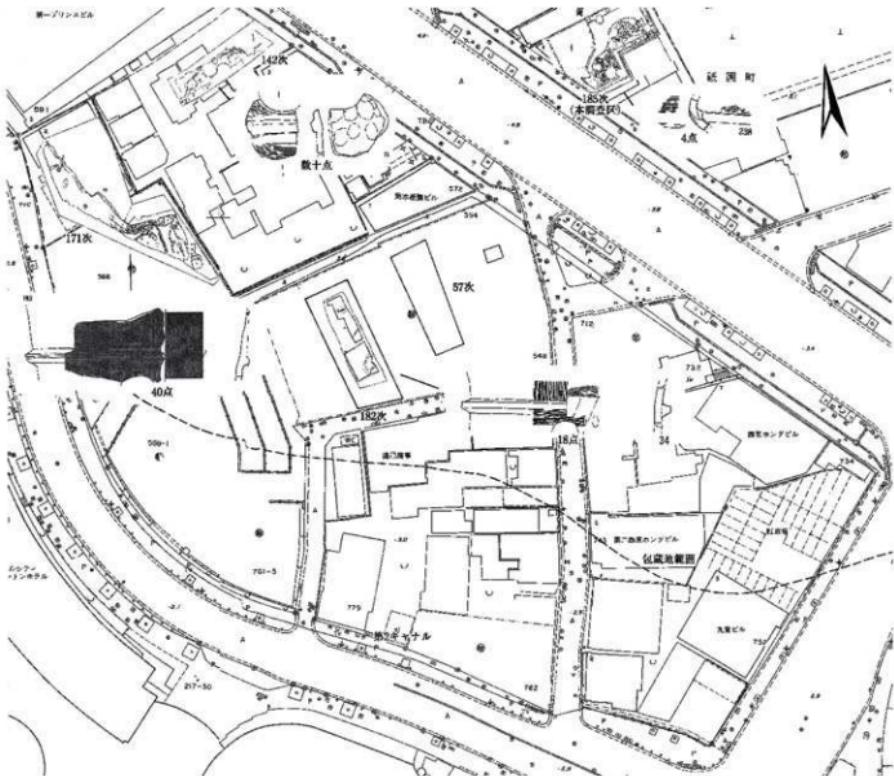


Fig. 33 捕輪出土位置圖 (1/1000 : 1/6)

Tab.1 遺構一覧表 -1

土壤番号	面	地点	時期	規 模	主な出土遺物	押団番号	写真番号
				縦×横×深さ(m)			
SK01	上面	A 2	古墳前期前半	1.08×0.5+α×0.68	古式土師器(壺・布留式系壺)	19	
SK02	上面	A 2	8C末～9C初頭	1.82×1.66+α×0.3	須恵器(壺・鉢・坏・坏蓋・壺)・土師器(坏・壺)・古式土師器(壺・壺・高坏)	14	10
SK03	上面	A 3	近世	1.7×1.4+α×0.48	肥前系染付(網)・白磁(Ⅰ・IV・V碗・壺)・陶器(蒸籠)・瓦質(甕)・上部質(七輪)・上製品(人形・瓦玉)・須恵器(壺・坏)・土師器(壺・瓶・壺・坏・高坏)・瓦(平)・鐵器(釘)・鐵幣・埴輪(形象)		
SK04	上面	B 2	12C中頃	2.1+α×1.7×0.45	青磁(瓶壺)・白磁(水注・Ⅱ・IV碗・坏・II高台皿)・中陶(壺・ガラス培塿)・土師器(坏・壺・壺)・瓦器(輪瓦系壺)・瓦質(甕)・瓦(平)・土製品(瓦玉)・石製品(滑石・鏡)・須恵器(壺・高台坏)・古式土師器(壺・高坏)	10	5
SK05	上面	B 5	古墳前期前半	2.0+α×1.45×0.18	古式土師器(布留式系壺)	19	19
SK06	上面	C 2	11C末～12C初頭	1.2×1.05×0.38	白磁(Ⅱ・IV・V・小瓶・高台I皿・平底盤)・青白磁(皿)・陶器(行平・甕)・土師器(丸底坏・皿)・土製品(瓦玉)・須恵器(壺・坏・高台坏・坏蓋)・古式土師器(壺)	10	6
SK07	上面	B 1	古墳前期前半	1.06×0.78×0.1	古式土師器(壺・布留式系壺)	19	
SK09	上面	B 1	古墳前期前半	1.3+α×1.1+α×0.1	古式土師器(壺・壺・高坏・壺・布留式系壺・庄内式系壺)・鐵器(釘)・弥生土器(甕)	19	
SK10	上面	C 1	古墳前期	0.7+α×0.6+α×0.12	古式土師器(壺)		
SK11	上面	B 3	6C前半	1.67+α×1.15×0.33	須恵器(坏)・土師器(壺・坏)・古式土師器(壺・鉢・高坏)	17	14
SK12	上面	B 3	古墳前期前半	0.65+α×0.78×0.18	古式土師器(壺・壺・布留式系壺)・鏡片・弥生土器(甕)	19	20・21
SK13	上面	C 3	古墳前期前半	1.03×0.63×0.25	古式土師器(壺・壺・高坏・器台・布留式系壺)	19	22
SK15	上面	D 1	15C後半	1.0+α×0.4+α×0.2	土師器(坏・皿)・瓦質(甕)・瓦(平)・古式土師器(甕)	10	
SK16	上面	D 1	古墳前期前半	0.8+α×0.3+α×0.04	古式土師器(壺)		
SK17	上面	D 1	古墳前期	0.9+α×0.7+α×0.05	古式土師器(壺・高坏)		
SK18	上面	D 2	古墳前期前半	1.0×0.6×0.42	古式土師器(壺・坏・高坏・布留式系壺・庄内式系壺)・弥生土器(壺・高坏)・埴輪(円筒)	19	23・24
SK19	上面	D 3	11C末～12C初頭	0.9+α×0.7+α×0.13	黒色土器B(坏)・瓦(平)・須恵器(甕・土師器(甕))		
SK20	上面	D 3	6C前半	1.8+α×1.3×0.43	須恵器(壺・甕)・軟質系土器(甕)・土師器(甕)・古式土師器(甕・高坏)・弥生土器(甕)	17	15・16
SK21	上面	E 3	8C後半	1.75×1.4×0.2	須恵器(壺・甕・坏蓋)・軟質系土器(甕)・土師器(甕・坏)・青磁(碗)・古式土師器(甕・高坏・器台)	14	11・12
SK22	上面	E 4	6C前半	2.3×1.7×1.12	須恵器(甕・壺・壺蓋・壺・坏・高坏・坏蓋)・土師器(甕・瓶・壺・壺・坏・壺)・石製品(磨石)	17	17・18
SK24	上面	F 4	11C末～12C初頭	1.3+α×1.3×0.38	白磁(II碗)・上部器(丸底坏・皿・碗・高台坏)・石製品(磨石)・鐵器(釘)・須恵器(坏身・甕)・古式土師器(甕・壺・壺・高坏・鉢・器台)	10	7
SK25	上面	F 4	古墳前期前半	4.5+α×3.5+α×0.38	古式土師器(甕・壺・壺・坏・鉢・高坏・布留式系壺・軟質系)・鐵器(釘)・石製品(砥石)・須恵器・弥生土器(甕・壺)	19	25
SK29	下面	B 3	弥生終末	2.3+α×0.9+α×0.3	弥生土器(甕・壺・高坏・器台)・土製品(土器片円盤)	23	30
SK30	下面	E 4	古墳前期前半	1.22×0.97×0.57	古式土師器(甕・壺・壺・坏・高坏・布留式系壺・五様式系壺・山陰系壺)・須恵器・弥生土器(甕)	23	31

Tab.2 遺構一覧表-2

土壤番号	面	地点	時期	規 模	主な出土遺物	博物館番号	写真番号
				縦×横×深さ (m)			
SK31	下面	D 3	古墳前期前半	1.25 + α × 0.75 + α × 0.32	古式土師器(甕・壺・高环・布留式系甕)	23	32
SK32	下面	F 4	6C末～7C初頭	0.95 × 0.8 + α × 0.42	須恵器(环)・土師器(甕・环)・古式土師器(甕)	23	27
SK34	下面	E 5	古墳前期前半	1.9 + α × 0.4 + α × 0.2	古式土師器(甕・壺・环・布留式系甕)	23	33
SK35	下面	F 4	8C末～9C初頭	0.78 × 0.6 + α × 0.4	須恵器(甕・环蓋・高台环)・土師器(甕・壺・环)・古式土師器(甕・高环・环)	23	
SK36	下面	E 4	弥生終末	3.7 × 1.8 + α × 0.3	弥生土器(甕・壺・脚环蓋・鉢・脚环鉢)	23	34
井戸番号	面	地点	時期	規 模	主な出土遺物	写真番号	博物館番号
				縦×横×深さ (m)			
SE14	上面	C 3	11C末～12C初頭	2.3 + α × 1.4 + α × 1.4 + α	白磁(II・IV・V碗)・土師器(丸底环)・石製品(砥石・炉壁・自然遺物(炭))・須恵器(甕・高环・环蓋)・古式土師器(甕・壺)	5	2
SE23	上面	E 6	12C初頭～前半	2.4 × 2.2 × 1.47 + α	青磁(越前・水注・高麗碗)・白磁(II・IV・VI碗・高台I・平底II皿)・天目(碗)・青白磁(碗)・中陶(甕・壺・瓶・黄釉盤・鉢・押鉢・ガラス培塗)・高麗無輪陶器(甕)・十脚器(丸底环・皿)・瓦器(碗・瓦・丸・平)・土製品(瓦玉)・石製品(滑石製鏡・火打ち石・薪石・軽石他)・鐵器(刀)・ガラス(平玉)・銅津・自然遺物(炭)・須恵器(甕・壺・环・环蓋・高台环)・古式土師器(甕・壺・高环)・ob (II)・サヌカイト(tuff)	5	3・4
SE33	下面	B 5	古墳前期初頭	1.7 × 1.0 + α × 0.7	古式土師器(甕・壺・环・高环・高台・庄内式系甕・小形器台・軟質系甕)・鉄片・弥生土器(甕・壺)	23	29
溝番号	面	地点	時期	規 模	主な出土遺物	写真番号	博物館番号
				幅×深さ (m)			
SD08	上面	B 1	8C末～9C初頭	0.23 × 0.14		14	13
SD27	下面	B・C-2・3	古墳前期前葉	5.5 × 1.05	古式土師器(甕・壺・塔・环・鉢・高环・手翻土器・布留式系甕・甕・庄内式系甕・小形器台・五様式系甕・山陰式系甕・低脚环・瀬戸内系甕)・土製品(土器片円盤)・石製品(砥石・滑石・輕石)・須恵器・弥生土器(甕・壺)	25	28
SD37	上面	A 4	12C後半	0.4 × 0.06	白磁(碗)・中陶(甕)・土師器(皿)・瓦玉・石製品(円盤)・瓦・古式土師器(甕)	10	
SD38	上面	A 4	12C後半	0.4 × 0.05	白磁(碗)・土師器(环・皿)・古式土師器(甕)	10	
その他	面	地点	時期	規 模	主な出土遺物	写真番号	博物館番号
				縦×横×深さ (m)			
SX26	上面	E 4	8C前半	2.51 + α × 2.7 + α × 0.46	須恵器(甕・壺・环・高台环・高环・环蓋)・新羅無輪陶器・土師器(甕・壺・高台环・高环・环蓋・鉢・甕)・瓦質(甕)・瓦(丸)・土製品(土器片円盤)・石製品(唐石・円盤)・鐵器(刀子)・古式土師器(甕・高环)	14	8・9
SX28	上面	E 3	8C前半	0.75 × 0.43 × 0.26	須恵器(甕)・土師器(甕)	14	

# 報告書抄録

ふりがな	はかた							
書名	博多141							
副書名	博多遺跡群第185次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1124							
調査者名	加藤良彦							
調査機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2023年3月18日							
所収遺跡名 ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		遺跡番号	遺跡番号	°	°			
福岡市埋蔵文化財 博多遺跡群 第185次調査	ふくおかし埋蔵文化財 福岡市等多区 北九州市 祇園1-415-1,415-2 415-3,414-2	40132	121	33° 35° 28°	130° 24° 44°	20080811 20080922	113.71	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
博多遺跡群	集落	弥生 ・ 中世	土塙 井戸 溝	弥生土器・古式土 器・須恵器・土 器・埴輪・貿易 陶器		弥生終末～古墳前期を中心とする集落		
要約	弥生時代終末から中世にわたる集落。中心は弥生時代終末～古墳時代前半にわたる時期で遺構の5割近くを占める。土塙SK36からは御衣壹をはじめ完形に近い土器4点が密集して出土。幅5.5mの大堀SD27は方帯周溝墓の周溝の可能性もある。当該区を含め周辺からは5世紀代の埴輪片が検出されており、付近に前方後円墳が分布する可能性が高い。中世では12世紀前半のガラス容器が出土し、工房が周辺に立地する。							

## 博多 141

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1124集

2011年（平成23年3月18日）

発行 福岡市教育委員会  
〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 有限会社 アートプロセス  
〒815-0004 福岡市南区高木二丁目8番7号  
TEL 092-592-3381